

日光山志卷之三

目錄

御山内寺院坊舎

痕後二十箇院

八十坊舎

青龍権現

浄光寺

慈雲寺

靈庇岡

鳴虫山

索麩遊園

学頭

御山主居

御奉り屋敷

西町

古頼

憾拾洲

納骨塔

鳴虫紅葉園

日光八景

修学院表門圖

別所四箇院

火之番屋敷

兄弟契

向河原

合満瀧雨園

通水橋

松立山

妙道院

釋迦堂

諸家墓碑

七瀧 同圖

二子山

凍岩

興雲律院 同圖

漆園

霧降瀧 同圖

山王社

池石

寂光

寂光寺

石燈籠

大尊地藏

如宝山 蔓延松 同圖

不動岩 同圖

同氷とろろの圖

萩垣面

小倉山

生岡大日堂 同圖

久次良村

蓮華石

方念佛堂

石香居

殉死墓碑

禁断石

飛龍子

指子岩

外山 同圖

御茶亭

小倉春曉圖 八条の内

尾立岩

糠塚

大日堂 同圖

求聞持堂跡

三十番神堂

不動堂

釘念佛縁起

羽裏瀧

清瀧権現

足尾道

深津茶屋

方等瀧 同圖

不動堂

拜殿

寂光瀧

裏見瀧 同圖

清瀧寺

馬込村 同圖

地藏堂

般若滝 同圖

大平

寂光権現

同伊藤長胤侍

清瀧村 同圖

清瀧観音堂 並利不

前二荒山 并風穴

剣峯

中葉屋

日光山志卷之三

植田孟緝編輯

御山内寺院坊舎 一山の学路一院亮徒廿ヶ院別所四ヶ院外一院

坊舎廿六院是を一山乃大亮と唱ふ外一坊八十坊あり

学頭 候学院と号以佛岩谷より此寺北表門を姓古 清殿の御門

たりとぞ元禄に未年六月清亮並小お成其後享保年中清門を修

学院へ編入といふ室町家の代管を移され清亮經營あり一清門ゆゑ

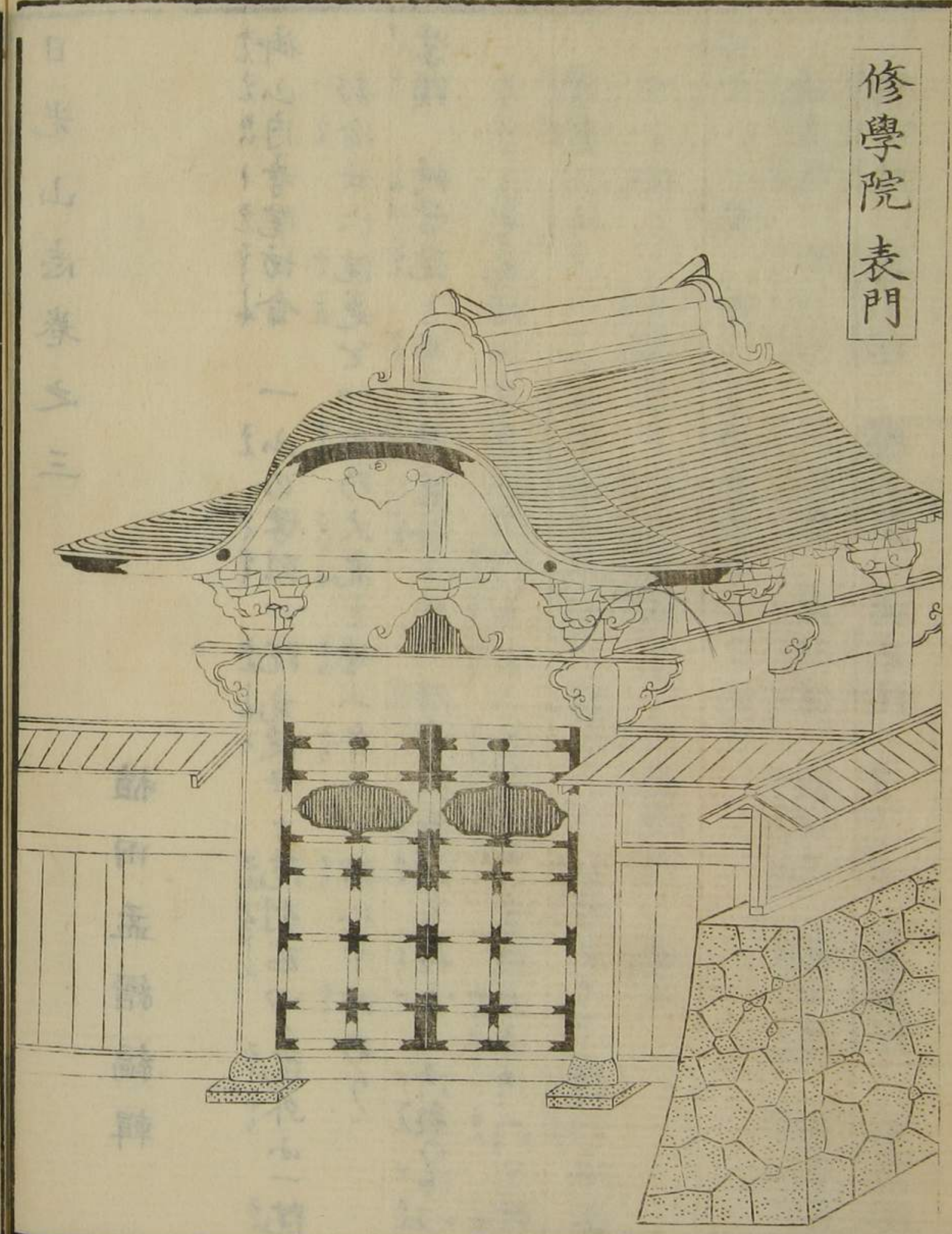
世に稀ある匠作なり土人等稱して二階清門と唱ふ

衆徒二十院 東山谷佛岩谷中ふあり

南照院 安居院 日増院 遊城院 教城院 櫻本院 禪智院

唯心院 藤本院 醫王院 護光院 以上東山谷 養源院 花藏院

修學院表門



真宗院 法門院 以上仁光谷 照号院 淨土院 觀音院 實教院

老樹院 以上中山

淨苗守居 是ハ元後の内より一院兼職之元法勢乃階級又老若の

事亦もより其器又尚ほを撰び元後の内より撰らる職あり

淨門主清家臣並社家令人以下神人又亦る海づ淨苗守居の指揮

あり

別所口ヶ院 大樂院 仁光谷 龍光院 淨土院の如影 安養院 中山新宮別所

無量院 中山大師堂別所

八拾坊合 妙月坊 妙金坊 真鏡坊 日誠坊 本龍坊 光榮坊

悦花坊 城秀坊 杉本坊 鏡泉坊 大光坊 祐南坊 永親坊

實勝坊 能親坊 道福坊 以上東山谷 正任坊 祐源坊 因宗坊

親妙坊 亮心坊 鏡徳坊 正定坊 妙力坊 通宗坊 大月坊

龍觀坊	常觀坊	龍園坊	淨久坊	林教坊	妙日坊	上仙巖谷
勝泉坊	奔月坊	園觀坊	城了坊	樓空坊	通順坊	光菴坊
通勝坊	慈性坊	仲音坊	光音坊	行實坊	醜醜坊	守光坊
誠祐坊	妙珍坊	以上南谷	不動坊	智觀坊	碩若坊	園祐坊
揚正坊	教觀坊	深妙坊	定福坊	正園坊	慶住坊	正範坊
觀德坊	唯教坊	什光坊	永南坊	園名坊	以上西山谷	大林坊
光祥坊	禪教坊	順教坊	實菴坊	文月坊	理宣坊	蓮勝坊
散光坊	妙園坊	深教坊	金菴坊	正覺坊	揚秀坊	林守坊
道新坊	以上南女神谷					

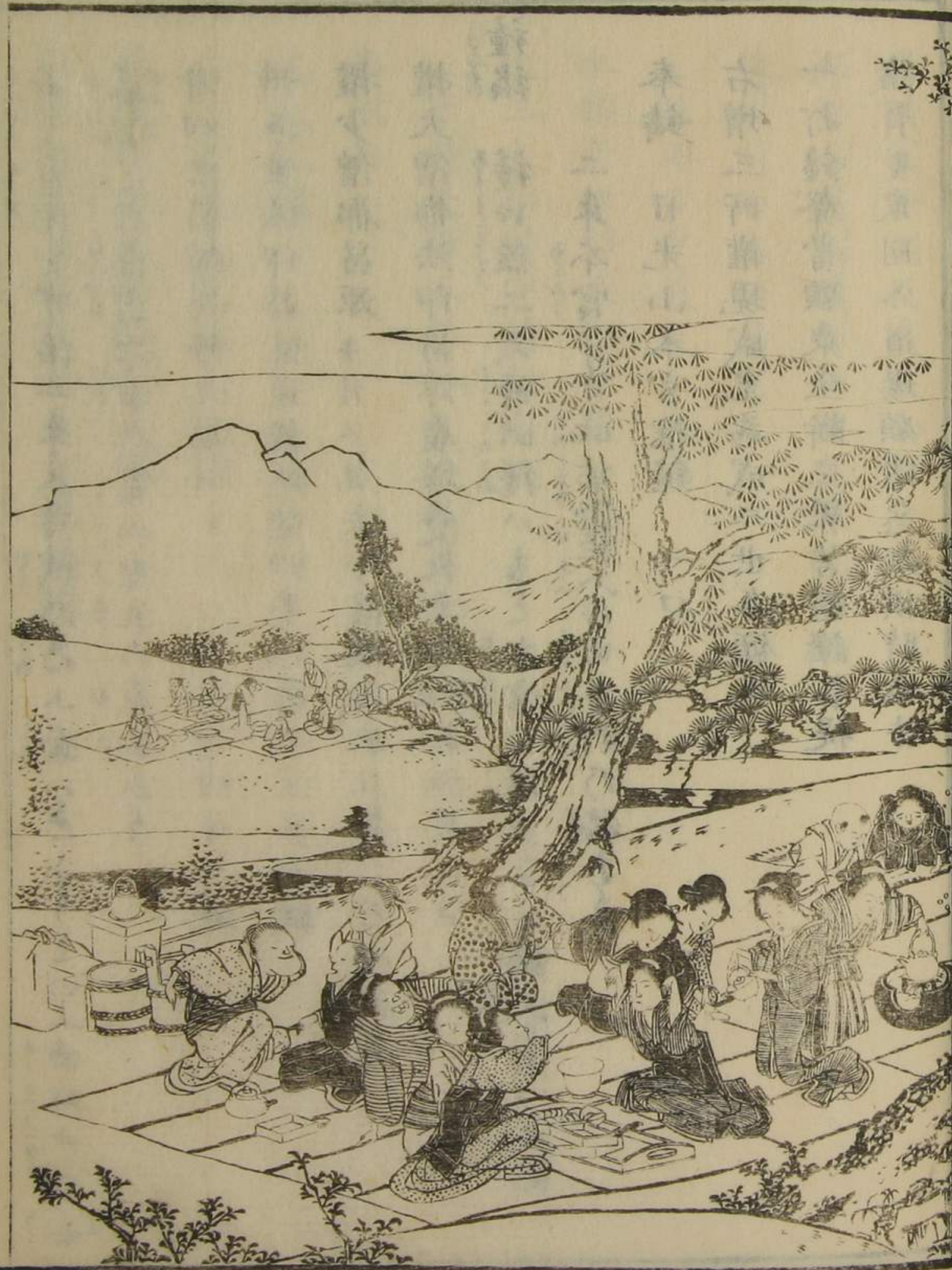
淨奉行屋敷 以門前の路白 淨殿地後淨徳飯より西乃方は水町
 水町蓮華石町へ建し 浄山内筋より中祿寺式ハ靈光荒次又ハ尾
 道一の往來あり

火之番屋敷 組頭を補とお對は是ハ浄山内火防の法備へり
 爰と下浄石より二ヶ所不勅番一慶安又年六月より八五子千人
 組へ 命せり是路商人組同公在勅せりとは是も寛政乃初小
 浄石一ヶ所を廢せられ爰の子所となり又至る子人既是人組
 既又人同心は十人外又歩人あり浄山内を警備しとはは又十日
 交際ある候今ハ半年来勅となり
 青龍權現 浄神社とも唱ふりとハ火之番屋敷不社既立て大なる
 池あり由奉り屋敷造より坊中の阿つりを若女神谷と號し
 なるは此社乃ありゆゑなり 浄徳座以來ハ其池水を填て火之
 番屋敷とせり是其母より浄徳町も俗人屋敷又と山口氏の子代等
 住居の地又渡りなるは浄神社も今の山際又移し由備は神社を
 弘法大師入唐し天台山乃善徳寺に寓せり時其寺の徳寺神又形

名附く兄弟ちきりとい唱へ正月八日を終ると
淨光寺 板橋町より還係山妙光院と号す此寺りと八仏岩より
淨光寺 往古淨光坊と号しと世尚山の宗廟主光の院乃供僧の
其一なりしが往古應永年中光の院乃後吾女神谷へ移ると
いふ又往生院といふをもと八岩地蔵堂の邊に在り楡山の墓所小
く空海師の妙光門乃額を掲げり然るに此地を一山の鬼の山と
ゆふ又應永にて吾女神谷へ移ると其後又寛永十七年十月往生院
第六供僧の坊とに綿打村の西今の州へ移るといふと舊記小凡と
ある由往生院の舊跡を今淨光寺乃孫院堂より六供淨光坊の跡に
正しく淨光寺なりされを往生院と淨光坊今合し淨光寺と
稱するもや古淨光坊ハ六供の一なりありしゆふ遺名のころ
今も土人為淨光寺のと成六供と稱せり諸古より傳はり光の院

西町 或ハ入町とも唱へ濟山内西より町あり 仁軒町
原町 袋町 本町 上中下 大工町 上中下 板橋町 此町は縦横
區を分ち財庫並例又軒を並く連住す
兄弟契 東ハ松系町より西町よりなる是町都を傳の者も三月上巳の
日よりして若菜摘を初より或は花見とも名附たが此小親の
を誘引し山林系世の花を爲て花遊など供り給酒會成勢三弦を
鳴らし鼓譟しけりといひ舞遊真するは成土風のあるといふ是成

名附く兄弟ちきりとい唱へ正月八日を終ると
淨光寺 板橋町より還係山妙光院と号す此寺りと八仏岩より
淨光寺 往古淨光坊と号しと世尚山の宗廟主光の院乃供僧の
其一なりしが往古應永年中光の院乃後吾女神谷へ移ると
いふ又往生院といふをもと八岩地蔵堂の邊に在り楡山の墓所小
く空海師の妙光門乃額を掲げり然るに此地を一山の鬼の山と
ゆふ又應永にて吾女神谷へ移ると其後又寛永十七年十月往生院
第六供僧の坊とに綿打村の西今の州へ移るといふと舊記小凡と
ある由往生院の舊跡を今淨光寺乃孫院堂より六供淨光坊の跡に
正しく淨光寺なりされを往生院と淨光坊今合し淨光寺と
稱するもや古淨光坊ハ六供の一なりありしゆふ遺名のころ
今も土人為淨光寺のと成六供と稱せり諸古より傳はり光の院



兄弟契
の遊宴

徳詔画

奉旨孤院を万治二年八月月絨乃為小棄つとて西町中の香
邊院とて境内に古乃當山座主の墓碑あり

卅四世昌繼逆修文安乙丑二〇六月廿四日入滅

卅五世法印昌宣逆修延德四年八月十三日入滅

權少僧都昌源 年月不見 法印昌顯大永三年六月廿六日

權大僧都法印昌淳廣塔慶長十二丁未伍月五日

鐘銘 鐘口徑二尺許このうら鐘ハもと本宮の鐘あると銘文あり文的

二年本宮より此所へ移入の由再刻の銘あり

奉鑄 日光山本宮推鐘 一口

右増三所權現威光為成二世各願也

一打鐘聲當願衆生斷三界苦頓證菩提

諸賢聖衆同入道場願諸惡趣俱時離苦

當將軍源朝臣成氏公

御留守權大僧都法印座禪院昌繼

惣政所西本坊昌宣

且那古戸道光 氏吉

本願權律師源觀等穀弘繼

大工大和權守浦部春久

于時長祿三年乙卯十二月九日 白敬

奉施入

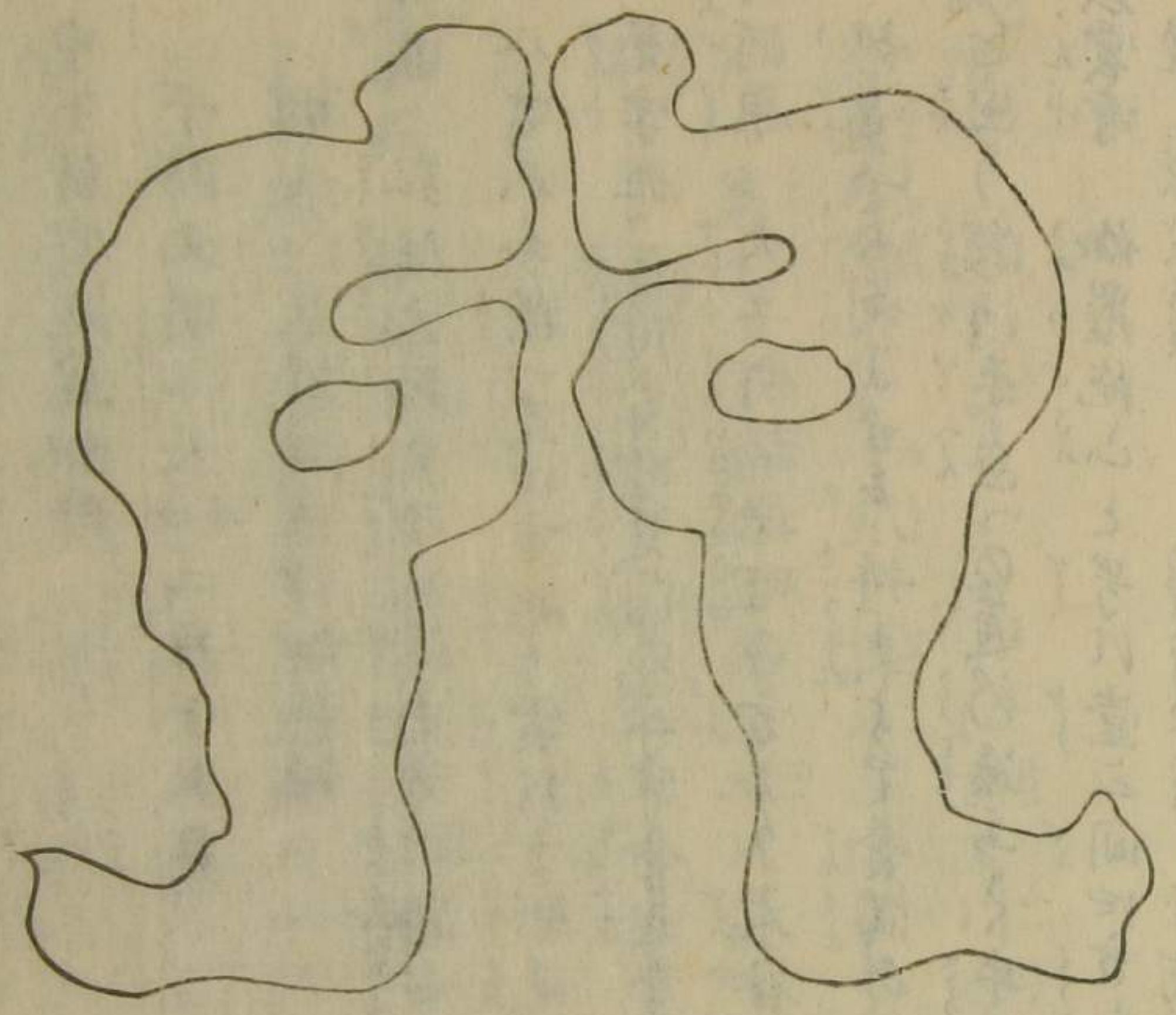
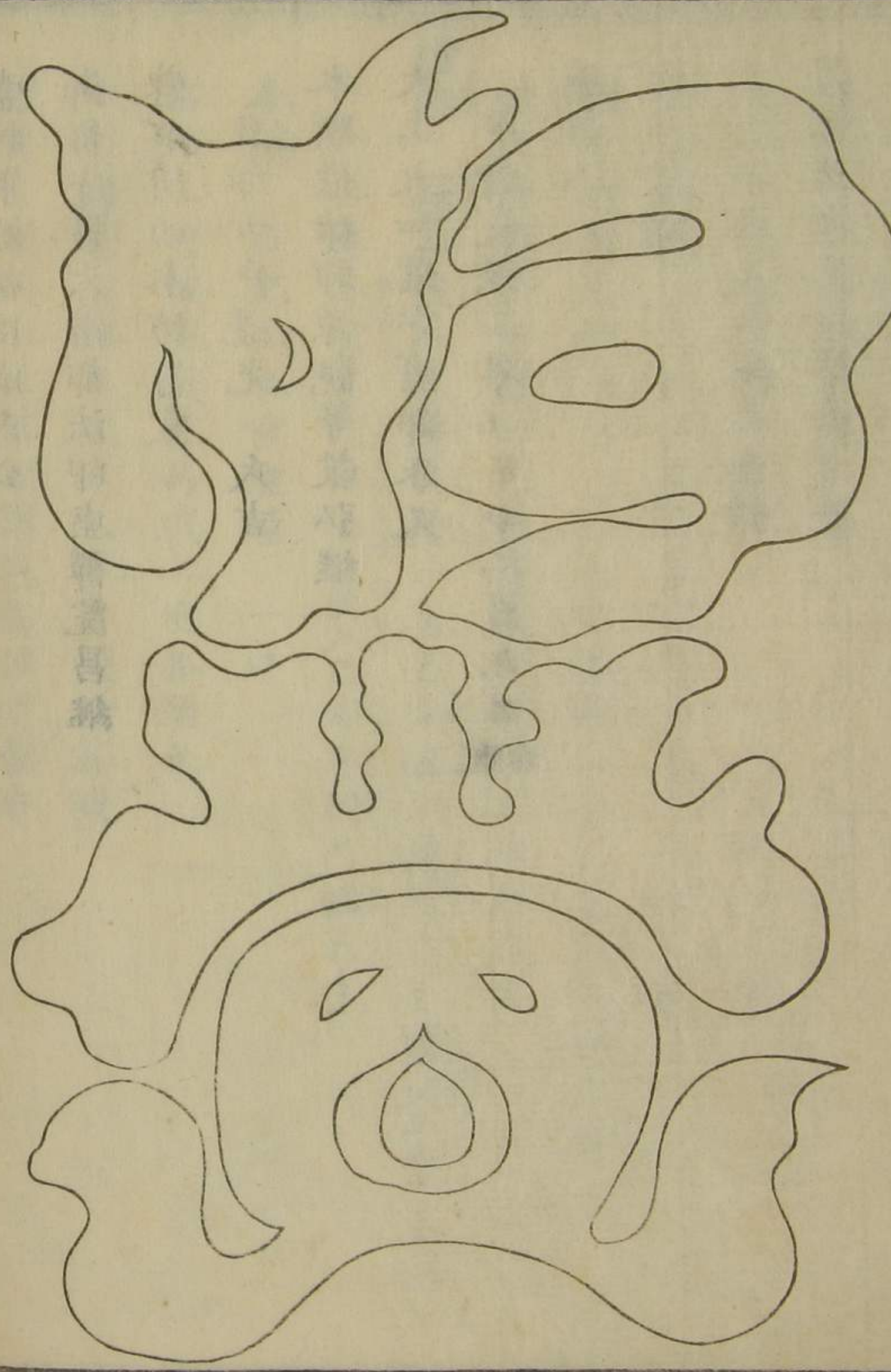
往生院鐘

右志者為天長地久御願

圓滿殊者父母覺靈成等

正覺頓證菩提別者者有緣無緣

弘法大師真蹟



自他法界平等利益故自本宮

申下新寄進處如件

于時文明二天庚二月十五日

願主 東圓坊權律師昌源

右額 弘法大師真蹟寫淨光寺什物古往生院の額ありとつ長一尺

八寸五分横一尺四寸廻り雲彩奇彫毫ハ外縁あり又其内ハ縁あり

梵字九ハ紺書妙梵門の三字金色を文字の字兼ハ出せり

向河原 大工町板換町の方より大谷川の橋を越く右ハ大町家由

初唱ハ直例ハ廿戸并史ハ定會満の大門踏ハ建以安より鳴虫ハ

を思ハ龍河系邊への通河路あり牛馬乃通路あり

慈雲寺 伽羅陀山と号以堂三間四方本寺弥勒地蔵慈眼大師の像を

安モ境内凡三三町中真開山モ慈眼大師の言才なる最教院晃海

僧正なりハ遠より寸産ハ合満と唱ハハ一布ハ山内亮徒年中江司

の持とハ 憾捨洲 慈雲寺より西小に尚里川向ハ乃水渡ハ絶壁の如くなり

巨巖ハ隙ハ時立ハ刺を以てこヤあり其奇状ハ形勢鬼工の

如ハ巖上ハ不動の石像を安以巖下ハ碧水盤渦ハ一潭底をうり

知ハ怪岩横九尺并堅七八尺あり平面ハ憾捨の梵字あり讀ハ

た

靈庇閣 憾捨洲のこをある川端一面乃岩石ある下ハ護廣壇を

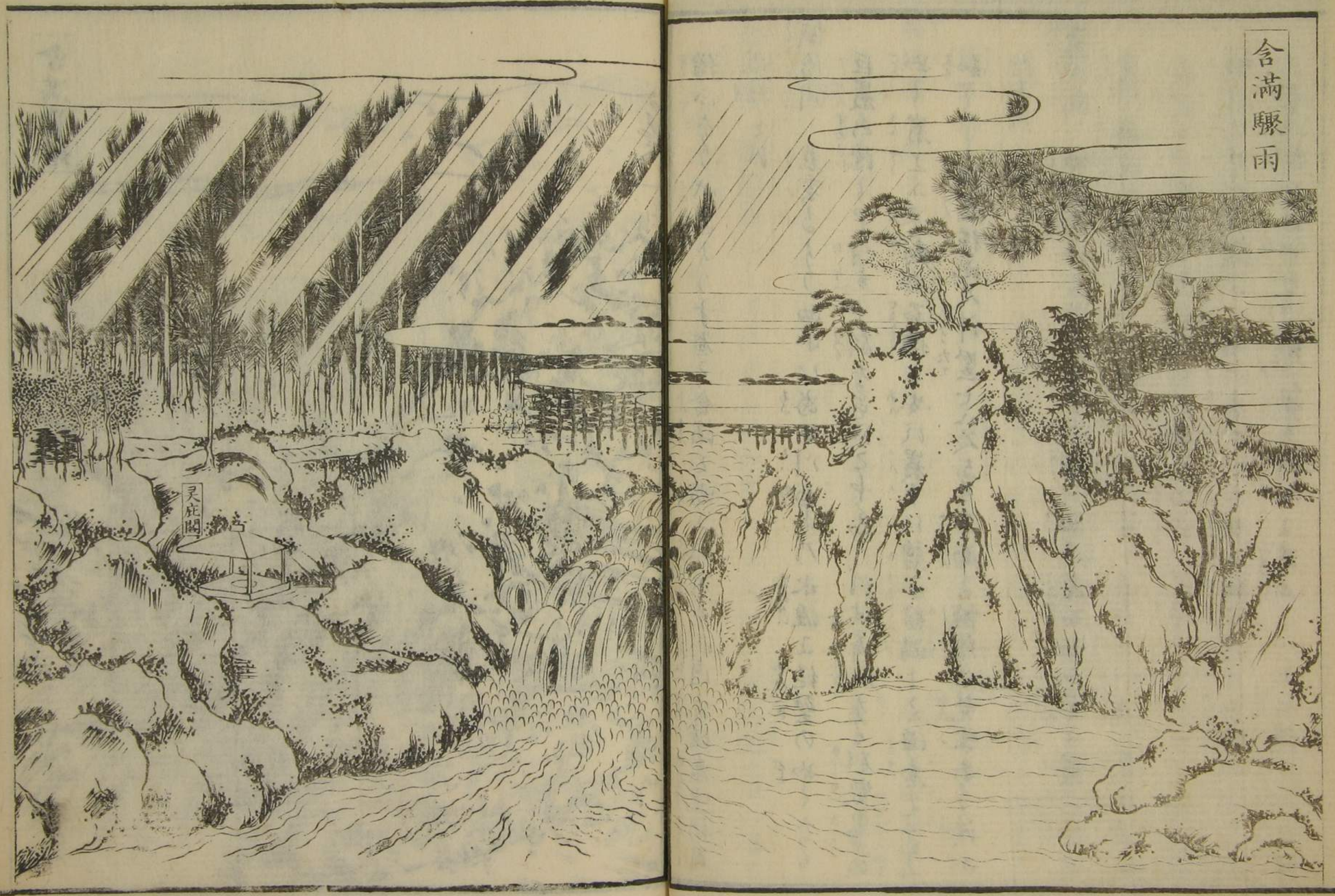
建て幽遠の絶系あり丸本柱乃四阿屋を造せりハ境ハ晃海僧正

草創あり小岸ハ七尺餘の不動の石像ハ晃海の造立ハ一潭岩の

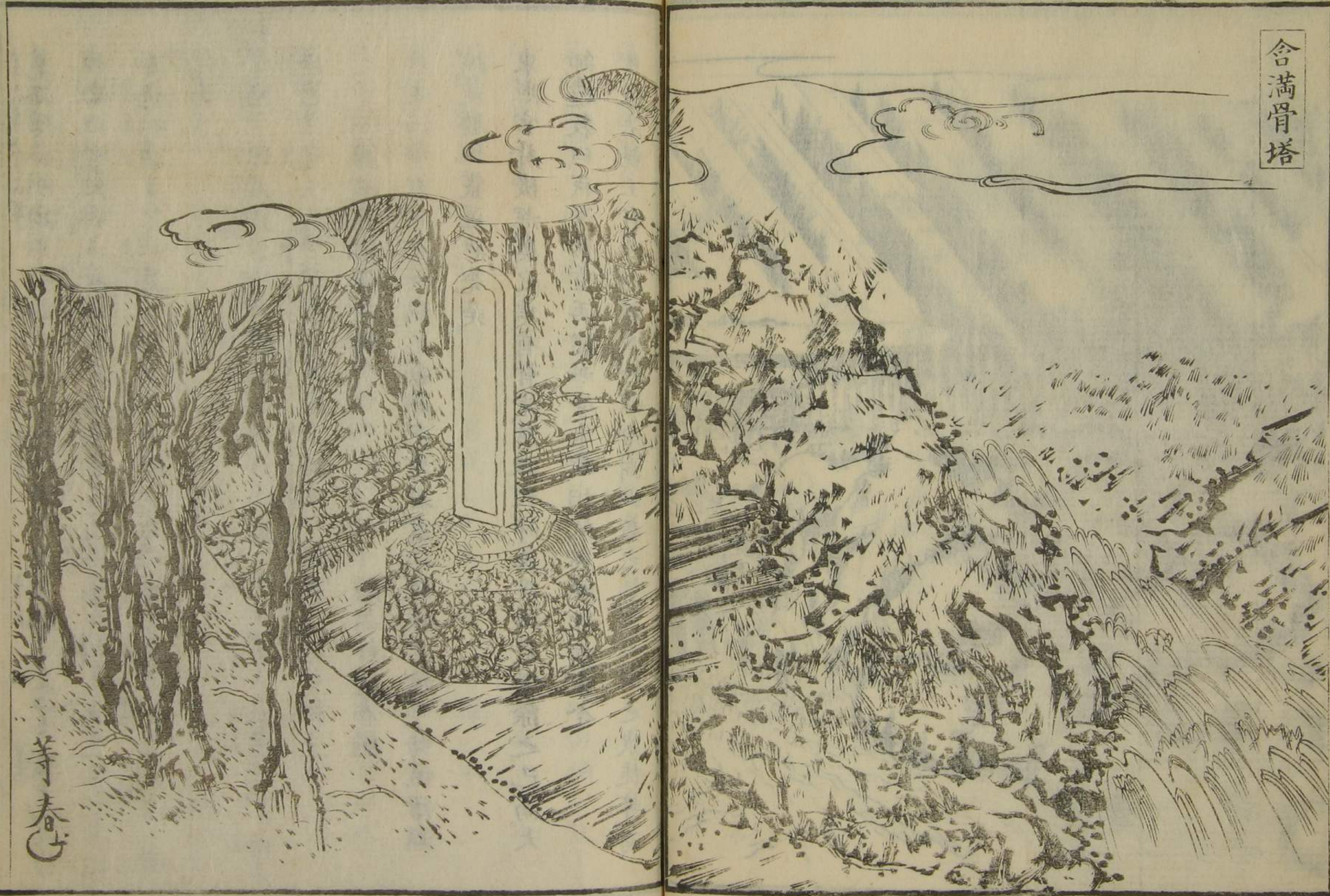
憾捨の梵字ハ僧正山順ハ書也ハ山順ハ贈大僧正生順の才子也

山養源院の三世なり護廣堂も同時ハ建立ハ一七日護廣僧百座

含
滿
驟
雨



含滿骨塔



等春

晃海傍正開闢一山の僧院修好せしと舊記に及ゆる處といひ
西南の言はれぬ石弥勒の座像者三尺許ある列し造まるるの數
百体は遙より川岸を傳ひ凡そ町裡も屹岩を階を以て川岸に骨
塔あり

納骨塔 礎石大さには尋常も阿らん石穴を穿り納骨すべきなる
造まりしに一碑銘石を建しり銘文ハ林羅山子の撰なり

憾捨淵納骨堂碑

羅山林道春撰

日光山中有淵潭世稱不動明王來現處也故採其種字號憾捨淵
誠是勝地靈區也先是

東照宮背後深奥之處有骨堂慈眼大師為畏神威毀除之已而大
師遺教曰我沒後宜再建此堂未暇相攸漸歷數歲方今

尊敬法親王有可以營堂於憾捨淵幽處之旨且大師之衆徒等為

過去萬靈自己菩提彫石地藏若干軀造立淵畔淵畔有巨石方八
尺許鑿開之以納新舊之骨乃立碑於此石上以記其所由願以此
功德骨化為水精乎為珠玉乎與不動地藏分其骨乎抽果與佛舍
利相共同乎骨已如此則其羣靈或上天或成佛以可證之乎

法親王繼大師之志受大師之緒以為此舉以納萬骨不亦宜乎若
夫葬枯骨則聖主之德也掩骼埋胔則孟春之政令也是非非余之
談聊併言

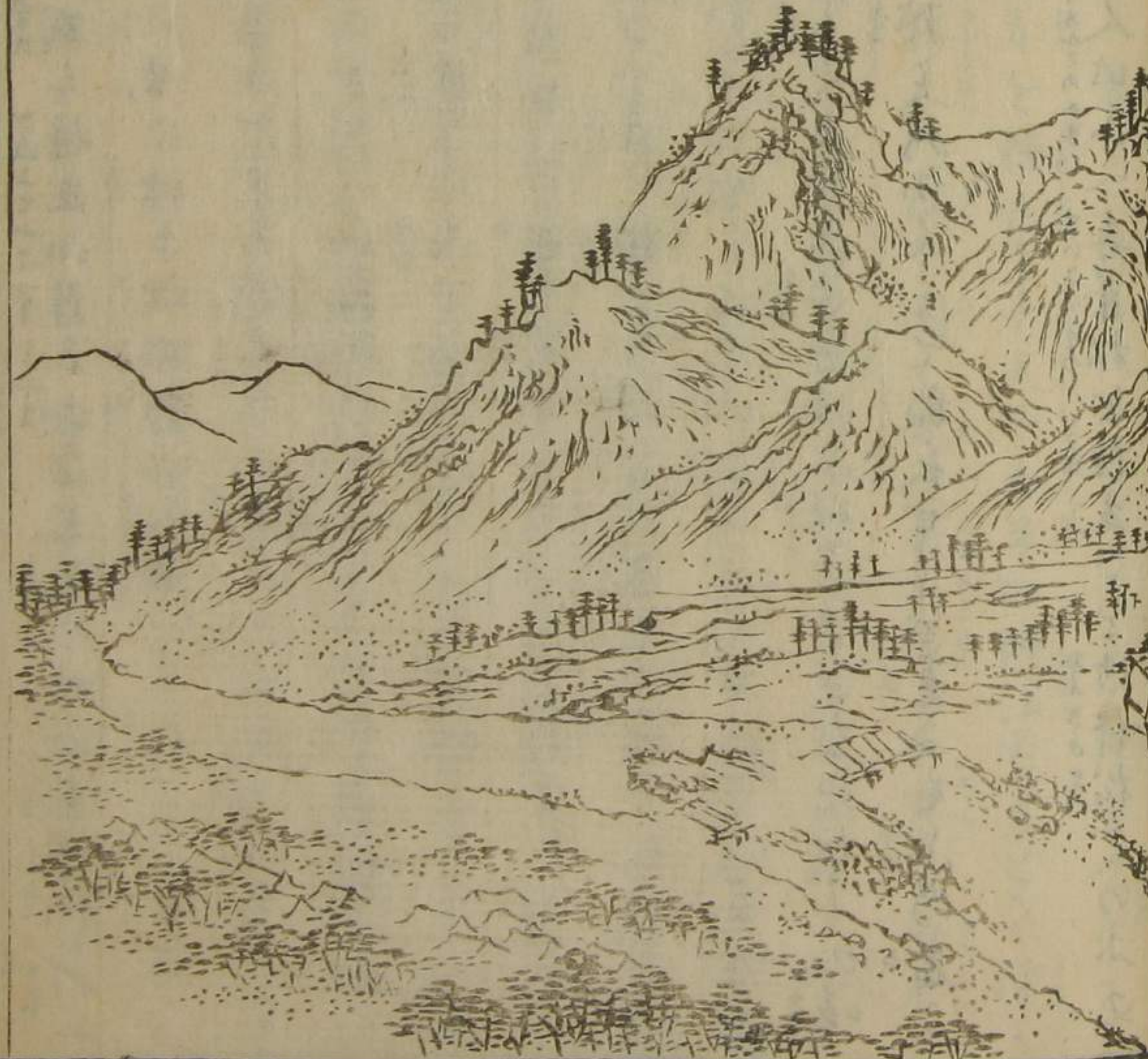
明曆戊戌年七月吉日

通形橋 向河系橋とも唱ふ大谷川小架長十六七間板橋あり板橋町

大工町を過り向河系町へ達し牛馬毛通路せり

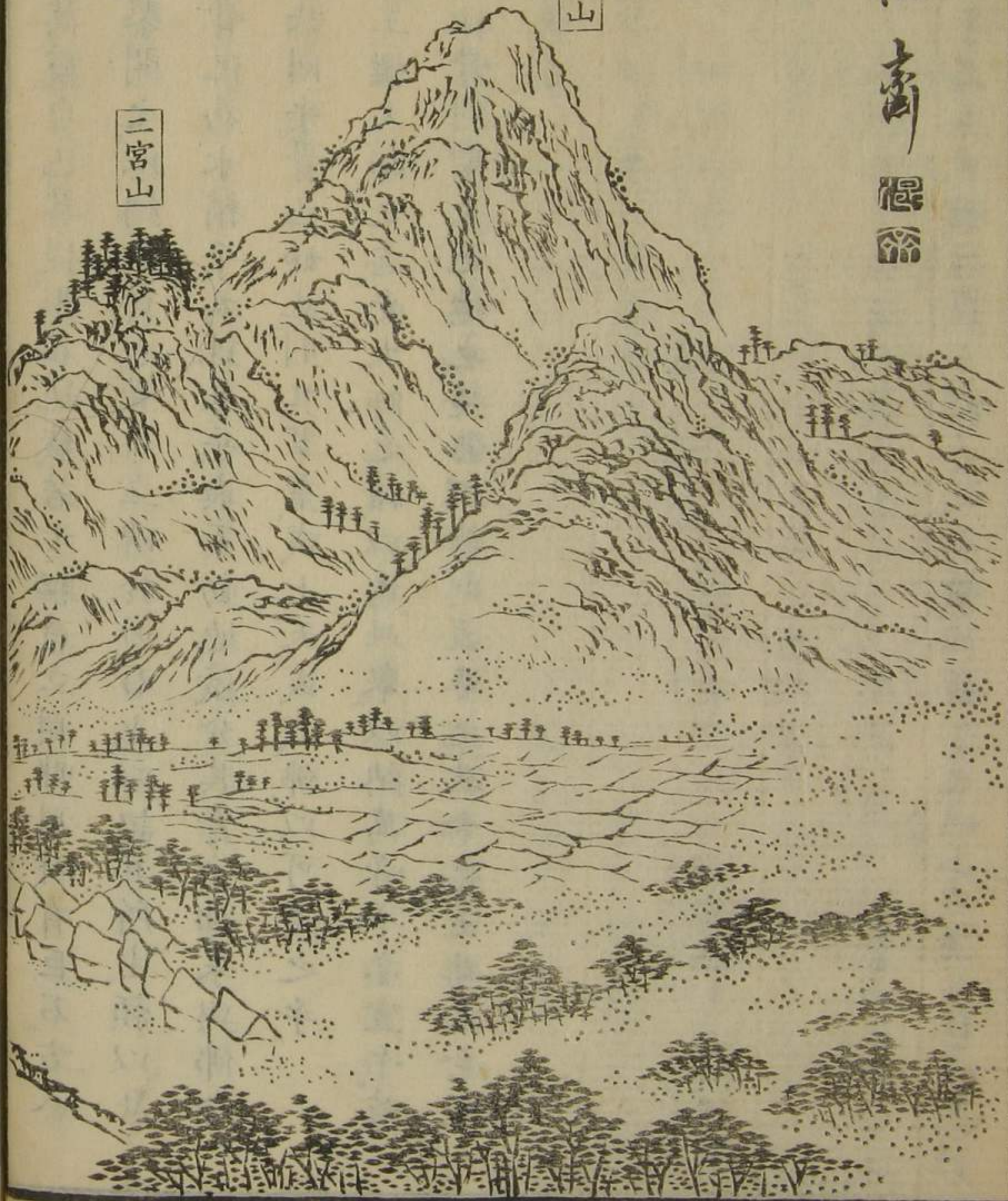
崎山 向河系と合流の後又高里言ふ山東西一貫りけ遙きくの言ふ
あり本名を大懺法嶽と稱し又小懺法嶽とそけ山の後又阿り其峰

鳴虫紅葉



松立山

鳴山



二宮山

鳴山

名を林とする山多し或は林立山月尾山たりと皆冬峰行者修法を行
不なり又を聖宿も此峰の續き相好灘宝形灘とも稱する所も有り
此山ハ紅葉の勝景あるをりて尚取の八系此内も色入らるるを
備古本乃翡翠するふと阿くは雜樹乃采山ふれど時々雲霧を起し
け山は雲生むる時を果し雨を始るるより名附くより一
しも此峰とつよは阿くは此を系世すくくそのゆ名言ふを
指くなきむしといふは阿く鄙ある俗言に嬰思乃初も是れを啼
出そ我鄙語よふれむしと呼く阿りけ山ふと一日此内に幾度も
雲を生す雨降ると時々なるゆ名を洩ふ松へすなれむしの時
出ると土人等が雨降ると洩ふ松へすなれむしの時
負せしむるなり

松立山 是ハ冬嶺行人け山へ毎葉松を植立るとは林松といふ又

一名螺立山ともいふ年々二月廿八日行人け雨りて標を吹立ると
阿り然しては松之本を植立ると天下泰平の修法ありとく種々
傳秘ありとけ里相行人乃標を聞くと宛彼最本院にて古より傳來の
修法とく細き者竹長八九尺上小扇之本を扇をくくさぬと丸く
結ハ附其扇の結付く雨より白苔を長く垂せり是を石の所香
居前の清水流る雨之本が溝の毒例へ立るなり古より町敷乃者
最本院へ扇と竹と葶を納る事ありりと其町敷終せしゆ今ハ
神石町此小間物商人の路あるとの故とく出せり依る二月朔日
乃未ゆ小松立山あり其松を焼ともいへり佳古ハ沖松橋ハ相好灘と
今の松橋此の峰なり故に古より今の上へ移るといふ

- 日光八景
小倉春曉 鉢石炊烟 含滿溪雨 寂光瀑布 大谷秋月

鳴虫紅楓 なきむしのこうくわ 山蒼夕照 やまのけのゆきざつ 黑髮晴雪 くろくみのひめゆき

小倉春曉

大明院宮公辦法親王

小倉山色似皇州不嶮不夷沿水流花氣氤
氳天未曙紅霞一片入雙眸

鉢石炊烟

朝鮮國聘使副使

任守幹

山下孤村遠炊烟一抹青隨風濃更淡樹色
晚冥

含滿驟雨

同 從事官

李邦彦

深潭徹底清潭上蒼巖古下有老龍潛時
作雷雨

寂光瀑布

同 正使

趙泰億

炎天樓閣欲生寒千尺飛流落翠巖時有遊
人來入洞錯疑雷雨門林端

大谷秋月

右同人

山前秋水浸山平涵潄冰輪徹底明聞說高
僧常管領心將此境

鳴虫紅楓

任守幹

仙山秋色晚琪樹尚青蔥獨有楓林冷迎霜
葉盡紅

神橋夕照

李邦玄

墮草傳神蹟靈源路不迷畫橋留返照虹影
落前溪

黑髮晴雪

同來聘使述官

李 璣

路絕懸崖不可緣雪花寒逼斗牛躔茲山亦

作瓊瑤窟積縞休誇富士巔

妙道院

寺址の辺今八束町と唱ふまじも古名は遠田母沢と号せり

寺號ハ佛龍寺と号し寛永八年天海大僧正仏岩谷へ建立し給ふ

今境内より釈迦堂昔より中山に在りて元和七年中山より佛

岩谷へ移しあひ其後寛永十七年今の地へ妙乃院と云ふ

といふ其初より一山乃香花院と定めらる寺領貳百石を附せし

末寺二拾口寺あり本号ハ阿彌陀を安と

釋迦堂

南向又間に面赤塗寺の西北方より本号阿彌陀昭士文珠

普賢本座像外又二号の阿彌陀是ハ惠心之作とい堂内右の方に

慈眼大師の像あり是ハ大師現存の肖像とて安色し勝道上人の

位牌を安と

石燈籠

二基釈迦堂の前より一ハ加藤左馬助と刻と又一ハ石川

主殿に奉納と銘あり

慈眼大師ハ寛永廿年十月二日東叡山より入寂したる日同六日

靈棺を出し同日當山座禪院へ入る日同日黄昏時遷妙道院乃

釈迦堂に安し一七日の間に法事あり曼荼羅供養餘修法事同十七日全身

を大黒山の石室に奉納歟と

撞鐘 慶安二年霜月禱成銘文在り出

日光山妙道院

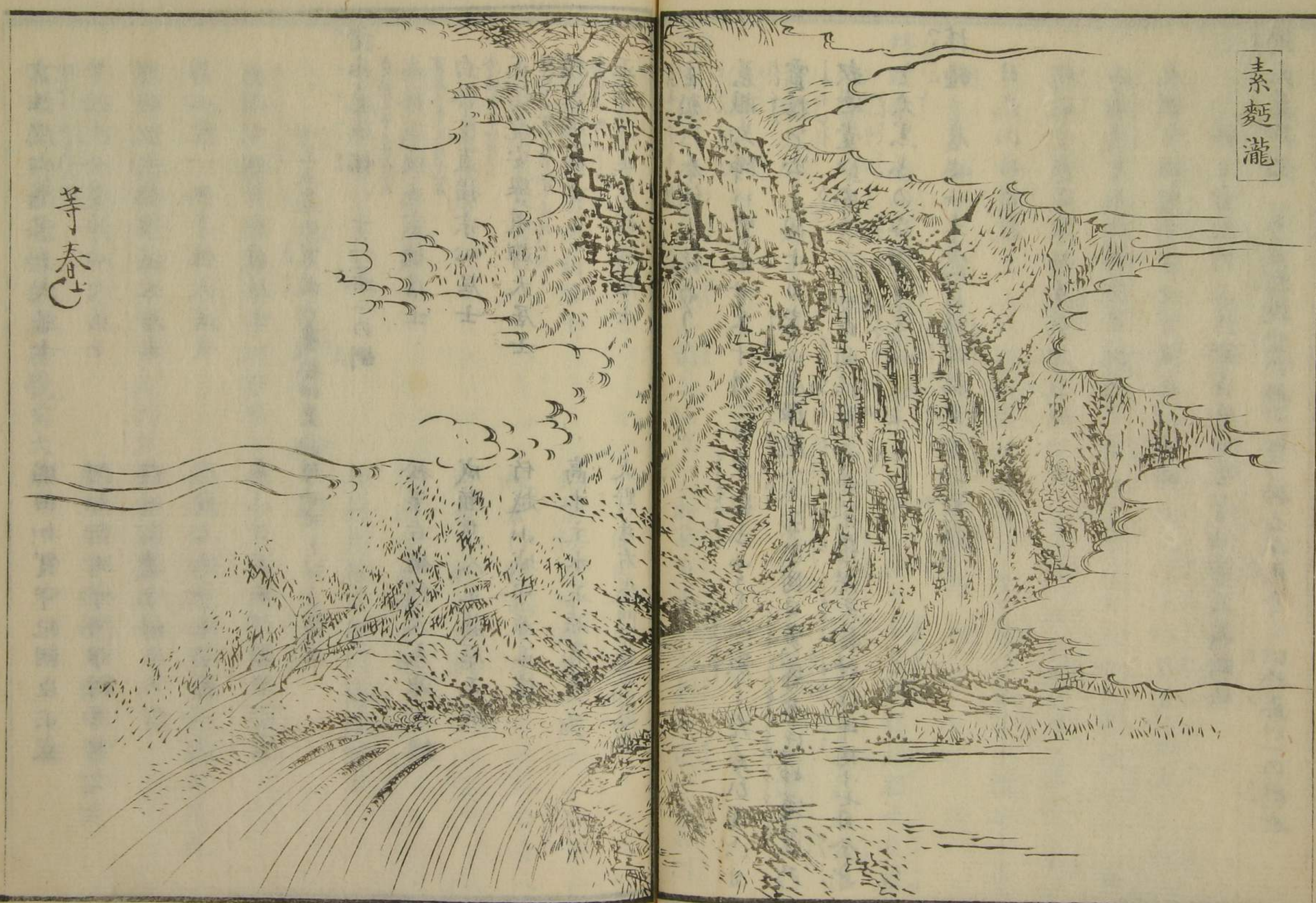
釋迦堂慈眼大師尊前息苦鐘一口

右當堂者慈眼大師草創而

東照宮兩部合躰之靈場也云下略

願主當住持三代顯密職位豎者法印天翁欽誌

殉死墓碑銘 五基釋迦堂の西より於合之側ありけり墓ハ一の例也



等春

素麪瀧

玄性院心隱宗卜大居士

堀田加賀守紀朝臣正盛

芳松院全巖淨心大居士

阿部對馬守阿部朝臣重次

理明院光德徹宗大居士

丹田信濃守藤原正信

靜心院一無了性大居士

三枝土佐守源守惠

真證院理哲玄勇居士

奥山茂左衛門藤原安重

諸墓碑銘 十一墓二の側

以上五墓の背面小慶安四年四月廿日とあり皆同

高林院俊庵宗德居士

松平右衛門大夫源正綱

白林院直指宗心居士

成瀬隼人正藤原正成

正信院安譽道輝大居士

竹越山城守源正信

釋性順居士

高木主水正源清秀

正等院道宗圓雪居士

天野彦右衛門藤原忠重

源盛院道立心圓居士

中山備前守丹治信吉

現龍院輝宗道翁居士

稻葉佐渡守越智正成

清庵源光大居士

板倉内膳正實名不載

心空道喜居士

渡邊半藏源守綱

光照院釋道清居士

渡邊半藏源重綱

了華院道宗居士

諏訪部惣右衛門藤原定吉

寒松院權大僧都法印衛賢高山

從四位侍從伊賀少將藤原高虎

從四位行侍從兼伊賀守源朝臣勝重源英居士

從四位下侍從周防守重宗建

寶地院前拾遺穩譽泰翁覺玄大居士

寬永廿一年七月十日

寛永四年上月十日

大性院月桂宗識居士

寛文二年七月十六日

空印寺傑傳長英大居士

寛永二年十月廿九日

大雄院永井月丹居士

寛文八年九月十日

從四位下信州大守大江姓永井氏岷山居士

姓名なり
按ふ永井尚政の碑あり

右の石塔狀迦堂の西乃方小二所に立あり

大牽地尊

系所為院表の双石に小牽ありおまき堂は小庵もあり

縁起の略云尚堂北北と姓首勝道上人當山同開の初男祈山一登

らせ玉小時に田母沢の流に陰しく習ひ玉に御細く玉に浅瀬を尋

玉小又忽然と地を尋視て玉に上人を懇諭し向ふまぎく涙り玉小

因茲大同年中以淨の直家石地を成建玉に玉に返り本堂每

寮坊とも小建玉を香花燈のをかきて日教勅修繕らりき

其後某氏を本邦よりて中禪

道蹟險難ありて老弱の寄事とをこふと加て殊に結界清淨の

庭場ありて女人登ると叶いれを一切花生結縁の爲ふは地に下

す之蓋け等像と勝道上人此也昔ハ中禪寺湯元に立あり

大牽地尊等と中ハ先之中むり當國於安郡板橋の城主板橋

監とり人あり其公豪強ありて更ハ佛神を敬せは乃ハ殺生

好之山所ニ極端と或時人教を從へて中禪寺の湯元ある鬼島

色小特ハ湯元と遊りて酒真小意は湯元の地をハ律及上人乃

りて世小靈仙ありといひ傳ふ去りてはそ奇特ありて我幸小

場之用に牽來りて一匹の太阿りは太と地を成首際一ハ玉

合せ此湖水へ投入をハ勝負のいふふありん若英仙なるを地

尊

了そ猪るゝぬ大に負る地蔵をば靈仏とて毛を結色毛を試る
殺し見物せん疾くと命トけを從者ども忽に堂上より首像を
出し彼大に結ひ合せ湖の舟へ投入り大に人強小驚死を候
首を揚る湖の面へは又町をり引行々を將監員從者りとも手紙
打らぬは阿比地蔵了そ大に引るやと一度又聲を揚てあひあを
不思議やけ首像忽水中より起せらぬ大を引て元の窟へ牽來
らせぬひりり將監立出て又湖中へ突出さんとせし妻は俄に
方に雲霧抄り目先もけの成り將監を始從者ども五拜すくく
動くと成る血を吐て向経けり折其意小樵丈とも居た
まゝにけ体をもく畏怖し急ぎ中禪寺の別所へ告げを居合せ
しり僧侶走り來りて先首像を湖より取揚彼大をらに放せ
大にすくく急ぎを備僧侶等讀經法樂し眾を謝くれば暫て

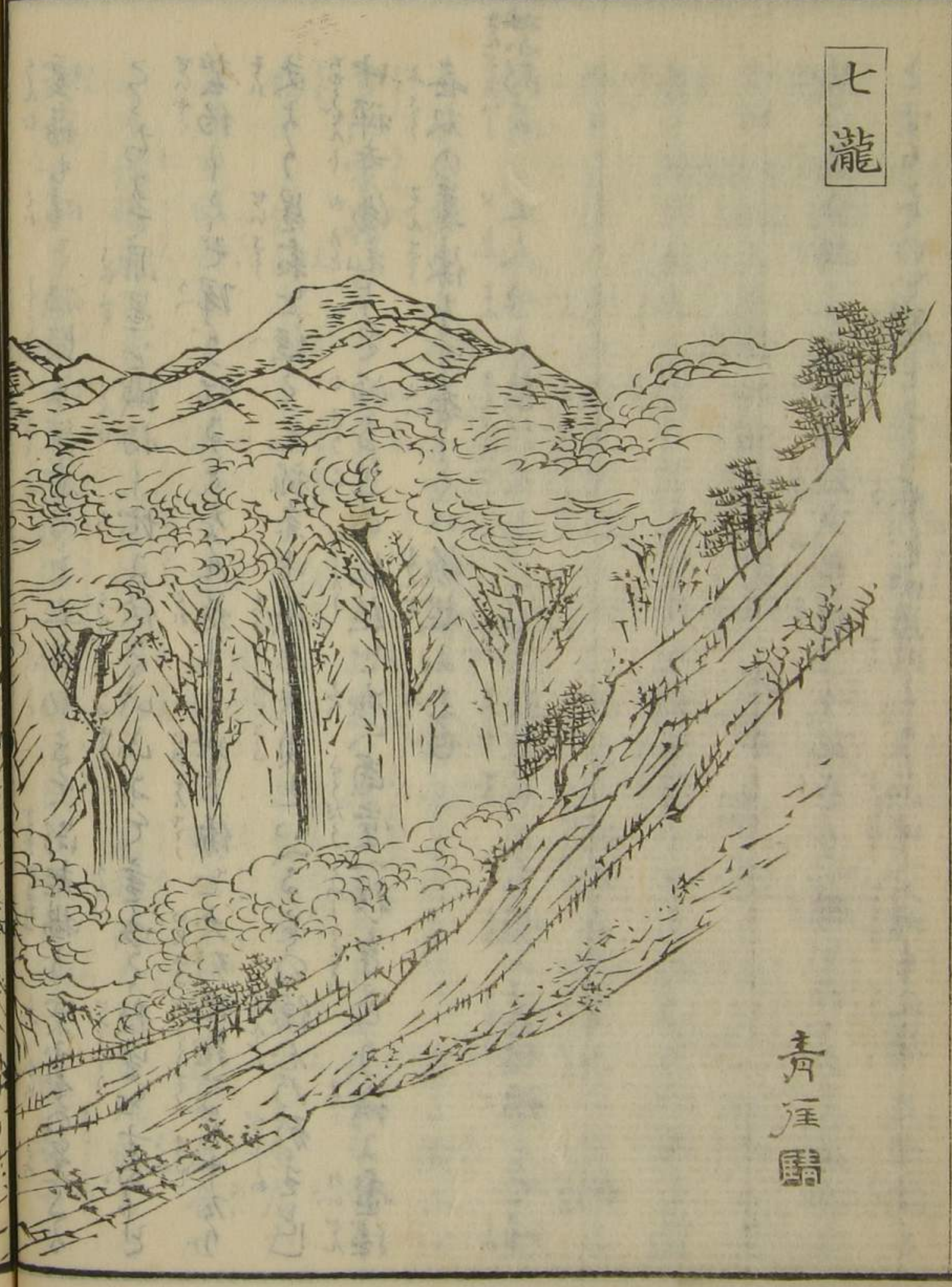
雲霧も晴る將監員從者ども五拜勅さす漸起揚り雲小夢の光る
くちろそ罪過を懺悔し地又伏す山あてききく殺生をすめど
誓約しくぞ歸りけるとなん是より此首像を大引地蔵号と申り
まより星霜を経る元禄年中縁系秀貞といふもの信を乃形主と
申禪寺湯元より湯守等の伝説を加く尚堂へ移すをり誠は靈體
無双の尊像なり委しく縁起は凡也
禁形石 土人呼く禁形石といひ或は殺生石とも唱へ皆略語して呼
くつとなり實は殺生禁形の塚乃碑あり湖尾並浄堂山より乾
ぬり廿町後山より建り是より外を殺生若くはぬゆ急は碑より
十町後山より獵師猪麻を特或は鳥屋と唱へ隠居して秋は山中より
出る鳥成捕るよ木の枝成聚るる所あり一繭をぬり鳥の体まん
とすのを捕とみく春は四月より山中へ入時又捕と世後と



赤ナギ山

イナリ川

七龍



青屋關

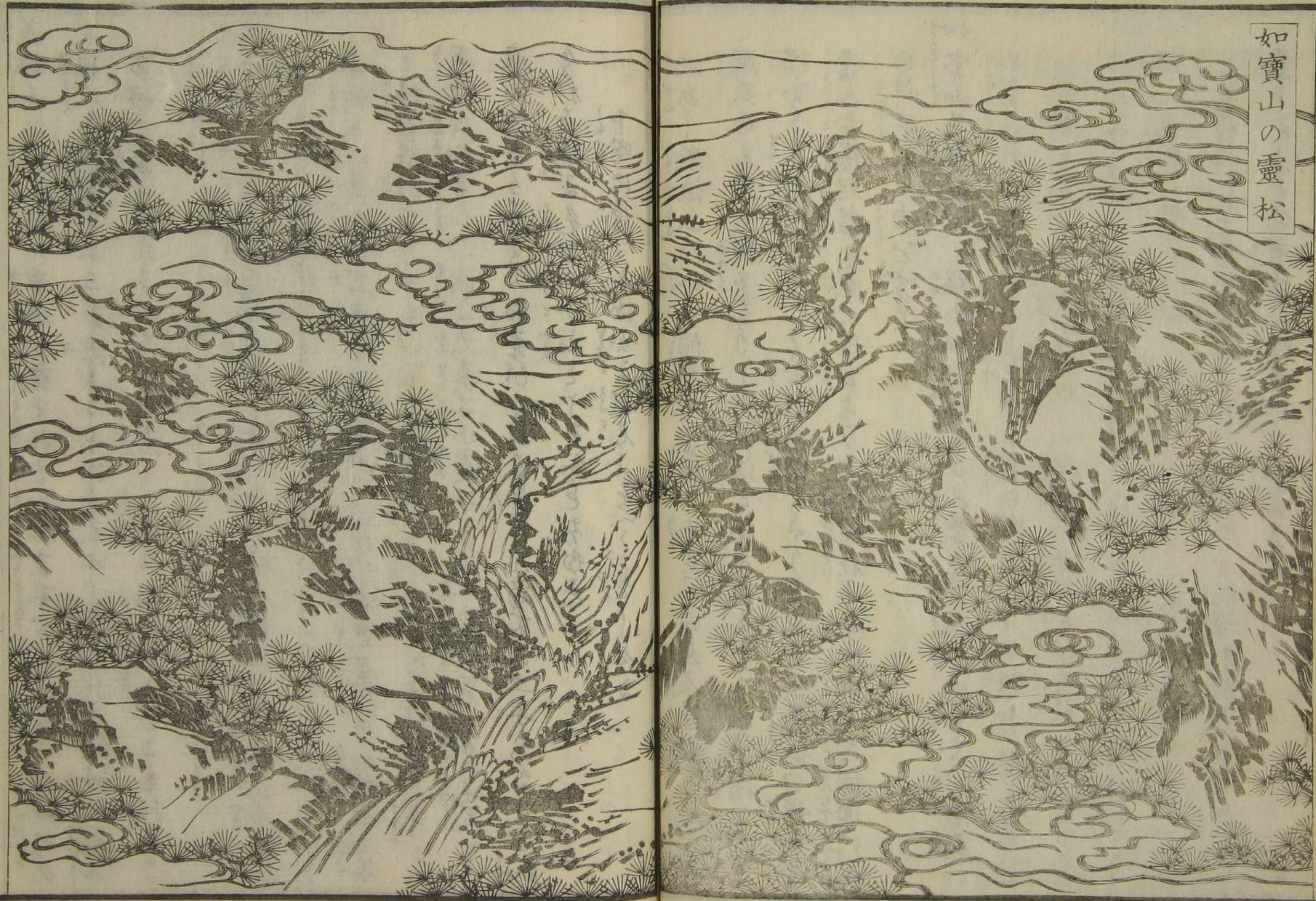
ぢり其雨と多登と唱ふおけ禁乃石の色ハ僧侶山修行する禪頂
乃なるを越成西小乃方へ小笹山を登り詣ると七龍の飛流する所を
色くををり

七龍 七滝ハ福荷川の水源なりされども河に隨ふれば巨岩多く
荆棘道を塞ぎ深山峻谷ふく淵れ色へ入りて深く谷間へ入り
ほど奔て淵の両を失ふゆゑ救生石乃道ををよばそ色皆童山
りて小笹系北山跡成一里半程迄四方園を市東の方十里成ををり
爰ハ女顔山乃續き登り下ををり見れば鑿削せらるれ如き絶壁
なり爰より北の方に七滝あり瀑七ヶ所より流れる水勢凡十丈或ハ
十百丈許りありなんとはい見ゆれども其下ハ水烟濛々として淵
層々として深史に雲霧盤渦出ると見る中ハ滝と又見ればをり
け色ハ容易にむる處に候はれども然るに寛文年中森雨の次俄ハ

洪峯ハ激浪山乃如く福荷川へ流るるゆゑ人衆救済流亡し
溺死のものも数多あり由其後ハ河系地となりたり土俗等ハ云
傳へて定年山ハ色く七淵の現しと云ふと思ふと妄誕の説あり
當山古縁起等ハ載て往古より七滝現在し今に至るを禪頂行者
の拜所あり由をゆて

如宝山乃蔓延松 姫小松と稱するみ系なり山中に多く生じ是ハ
如宝山北小裏より山上より凡八町をりりが間を以て續き南へ之
谷を越え北へ七谷を蔓延し根株乃直而まき尾一本の色と
す名あり形もまじ直なるゆゑ実又名本といふ處ハ峰候なり
行人は松の枝上を渡り禪頂なる道なり未看此北長松ありは色
者人乃往見る處に候はれども松を候はせし僧侶も語り又を採葉を
業とむるもの等も小話を傳ふる者あり

如寶山の靈松



飛鉈子 このきざつ 此器物ハ男辨女顔そ非言山に在不宣ら凡そ峰修好の
仍人此器を二三年見ざるにありといふ形いちひる凡そ族の鉈子
み似る蓋もたれとある由是に山鬼の好く玩とするもれあり
といふ

二子山 ヤチノミヤ 八雲津抄藤原家にも下世とあり或は下下世の山とい
ふべけれど尚不此山といふありとせしむるに似たりされども古くより
尚新ふ二子山の名あり土人も傳へいひて寂光荒沢の山續ふ二子
と稱す山ありといふと目小立る山も阿久比おの考ふるふ
男辨山如宝山乃間又大真子小真子とて二の山二麓の留小吃立せり
真の子なり藤原が御並びしれを是れ南岳の二子あること知
くれを慥と先を二子山とすそあともあき
下世に修りくは女と形見よそへくきくたる

後撰 二子山このにふえ福ど福鏡そこのぎを尋ねてぞやる 六帖山人

六帖 下世や二子山乃布心ありくは人をききのきあるの南 六帖山人

集 長きよに君と二子山乃ぬとあくとをきくぬ物務どこの 信明

名 是より二子の山をそ原にうとるく消ぬべさう般 後撰

日 龍人を鏡とやん玉くげ二子の山といひる月乃事 日

不動岩 福河川の水原なる山麓又あり其形勢の似たるゆ名附 名附

なり言ふ文許あり

摺子岩 是も前の續きにあり田舎まで稲穀の粉を摺りくる白を

摺子と唱ふ先も其形乃似たりより名附く大に二回に方許言六

石絶あり

凍岩 是も前と同石岩の凍と似たりとあり六月乃冬天よをけ

石の岩穴小氷あるゆ名附きり一面の岩石陰地あり巨岩りく

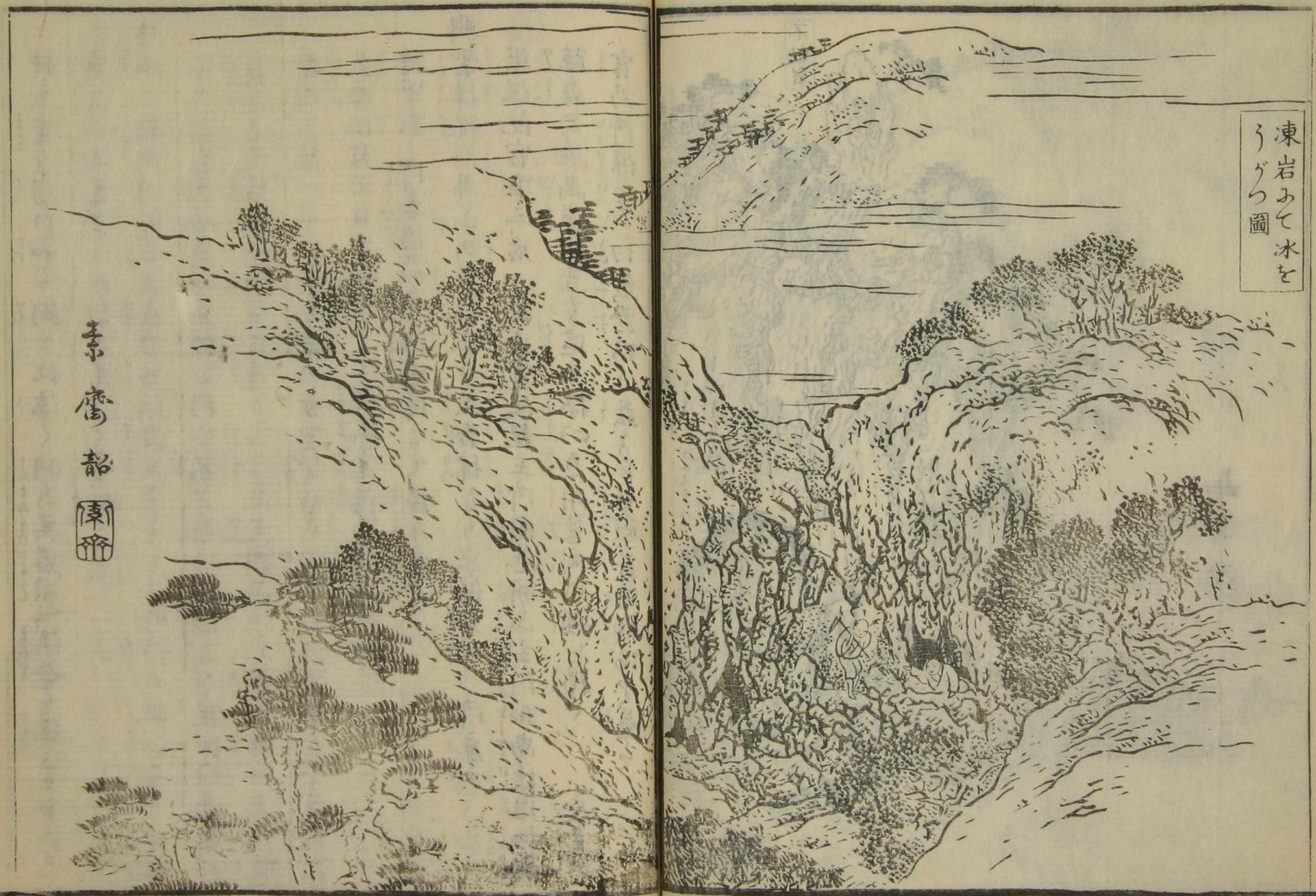


不動岩

スルスイハ

中
ノ
西





凍岩みて氷を
うぐつ圖

素齋 韶
[Seal]

ほも重り窓の如く漸くに深く洞の其岩間へ流るる凍るるその
炎暑の御夏より氷を取来りて賞玩也

外山 福荷川を踏み良乃方に直立する二町許の孤山を名づる

より上を志嶺巖ゆ多額を打て宅を和何り頂上を毘沙門堂並に
竈屋あり皆岩の校習又造る山と尖頭あり堂乃廻り又松楸
穀根岩内に生ひ茂る東の方を名を主生堂於之を造る遠天に
見ゆ正月三日を毎日とて法人系詣あり此地也

將軍系 所奉詣乃初に園場あり遠を臺也

興雲律院 外山の麓にあり天台律なり享保年中 所座主

崇保院宮准三后一品公寛法親王所用基岡山玄門和尚境内松樹
陰森と幽邃あり遠は楳の丸園薑岡の額を掲ぐ 座主の
宮乃所深第一切徳苑あり茲も覺室産の額あり是也

公啓法親王の所奉佛殿小威光殿乃額を掲ぐ

准后法親王の所深奉を

萩垣面 此地よりと稲荷川迄に在る萩垣町といひ寛文中の

供所小流失し其後同町の相地面に住するゆゑ今萩垣面と唱ふ

然る成土人等附會の説をまゝ市面といふを誤り傳へる半欽考の

古き面一川天より降りしゆゑ市面と地名せりといひく

俗説を傳へり 所神領村名寄又外山村と出づるは此地ありし

所茶亭 萩垣面より東の方 所門主の所方此所別荘なり春は小

倉の妻産を賞し秋は連山乃紅葉を名づる佳景の地あり系極黄門

の小倉此山莊に擬して設るふや

漆園 是れ小倉山の續き鳴沢川といふを越る其上なる系野の飛

あり色をいふ漆成植付とせしうど原野の續きゆゑ年々火乃

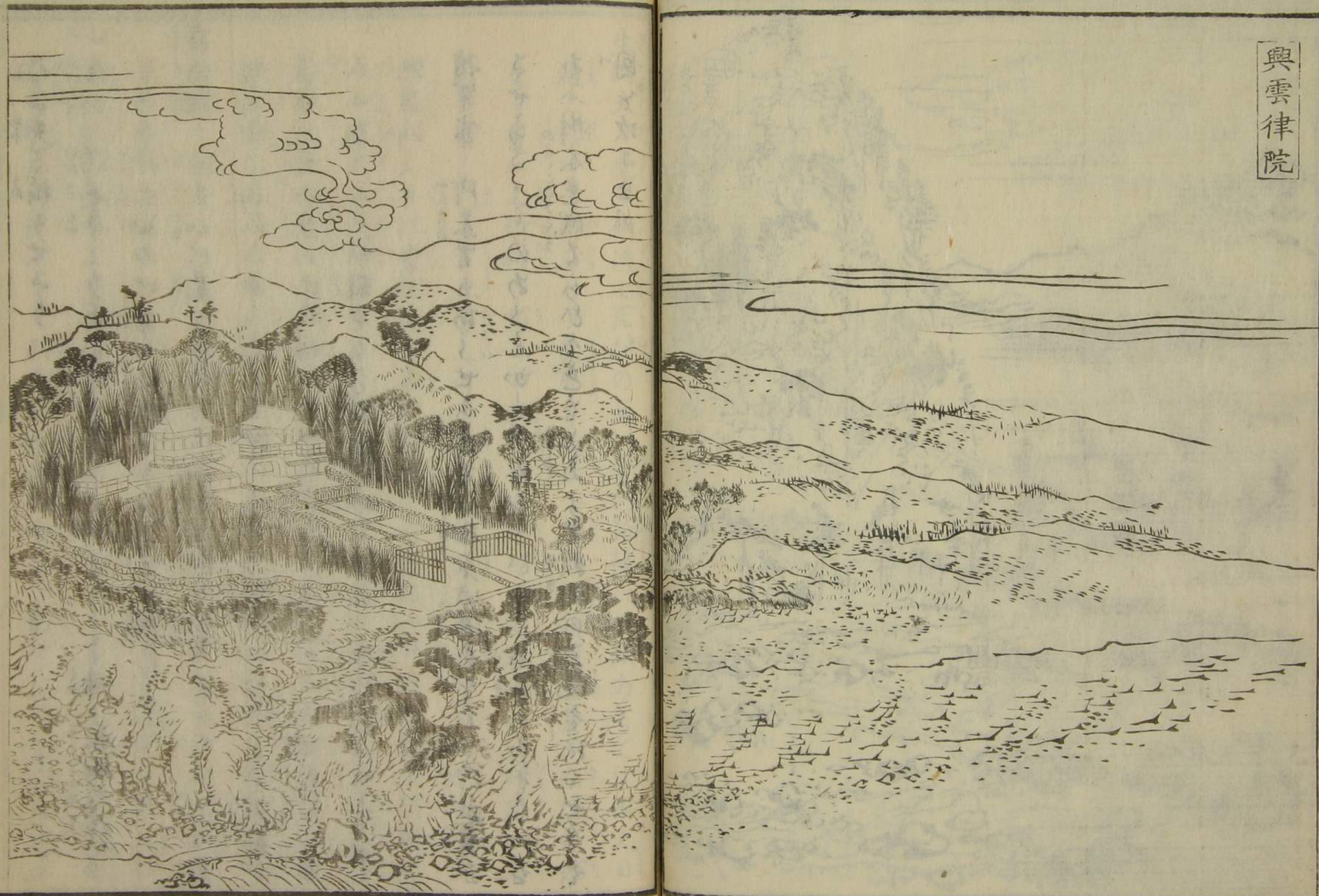


等春

外山



興雲律院



為多多く枯らせり

小倉山 済茶亭より東に續きううぬ山あり峰に松樹数根つ

なりり 済茶屋の北邊も松樹さうえ芝生ひ茂り

霧降龍 小倉山北麓を通り北に山合を或に登り或を下り凡一里

峰を經く山路みよりまよを断のりて坂路一町餘下まよる

瀑布を登ふ言ふ六指間もあまき山より龍流す水沫教級の岩

石に滴りふさげ教級と烟膏の如くゆきよ香降乃名記とて

遊き以

將軍家 済茶屋もあらせらるる瀑布とい瀑布とて 済遊覽家

させらるるこのあらんぬとのえりひあき瀑布れあきりにあ

あふ樹木悉成らひを色を山上よを教級の龍流をほくせりそ

図と次小出

生岡大日堂 街道七里村の西北方の路傍に小阪ありて生岡大日

道と銘ぞ一碑石あり其石より左へ折る阪路を登まば丘陵の地

なり安い上新村の地にて大日堂の辺に生岡と唱ふる村乃小名

ある堂一仍る里人等上の大日とて又生岡の大日とも唱ふ

此所に大日此堂地悉古木乃杉森とて堂地入はたの旁に列樹七

八本皆大さ丈餘あり右の方より極の古木並び立ち是より大日堂へ

向ひ六七回堂に向拜附之間に面積は本寺に弘法大師の作といふ

堂の後を接して老杉樹此大なるもの七株あり二三株ハ殊々大樹

あり凡丈八九尺も周廻ある堂一紅葉地は垂らるるさぬハ屈曲

して老松に似たり堂地の麓を平垣をり高地あり隣邑の野に北

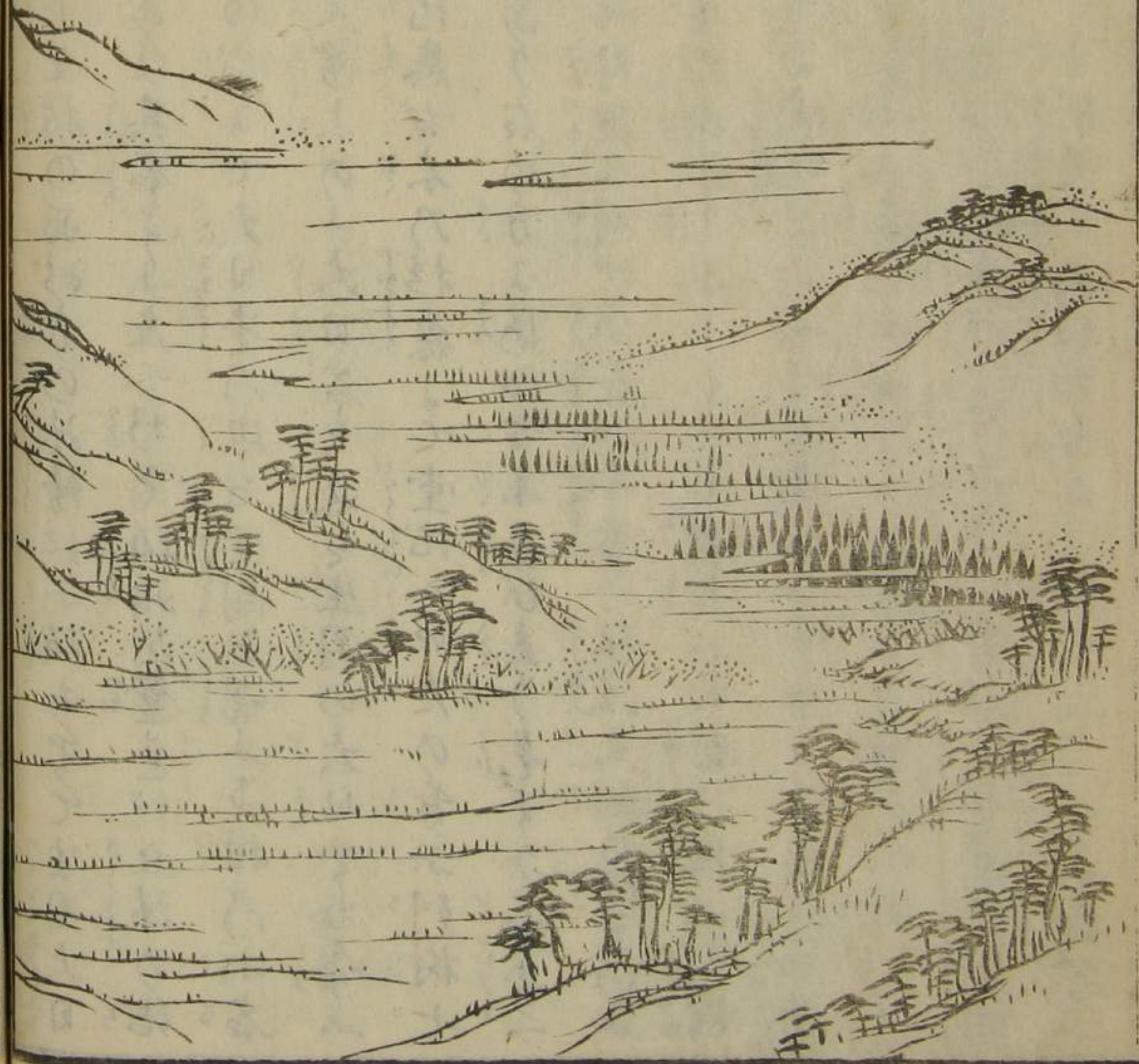
山王森の色まぎ陸田はけり借一圃むうハ安乃大日孫小山五

社も惣昌の地あり別當其修坊舎をて教宇ありといひ傳ふ

狭山亭

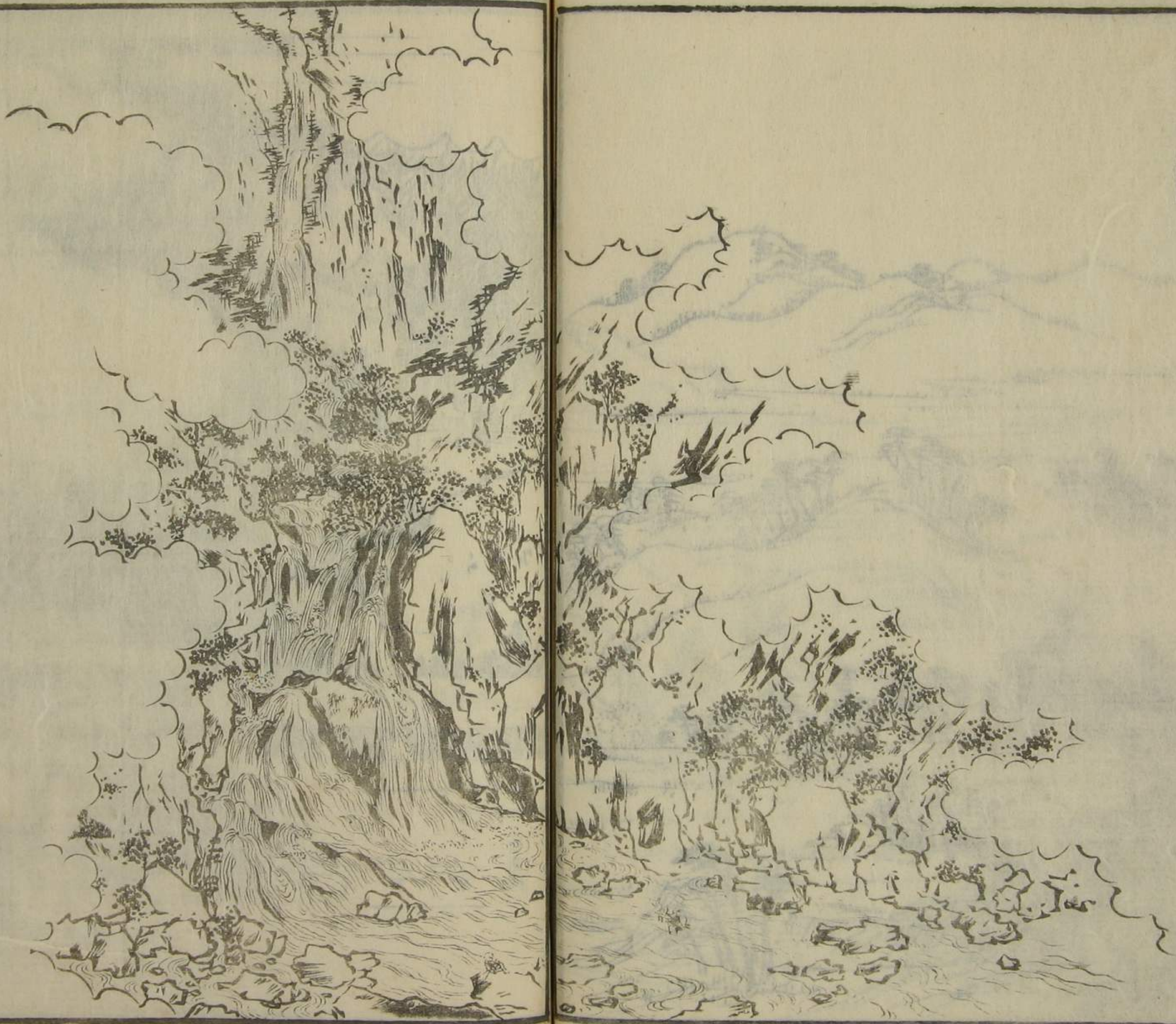


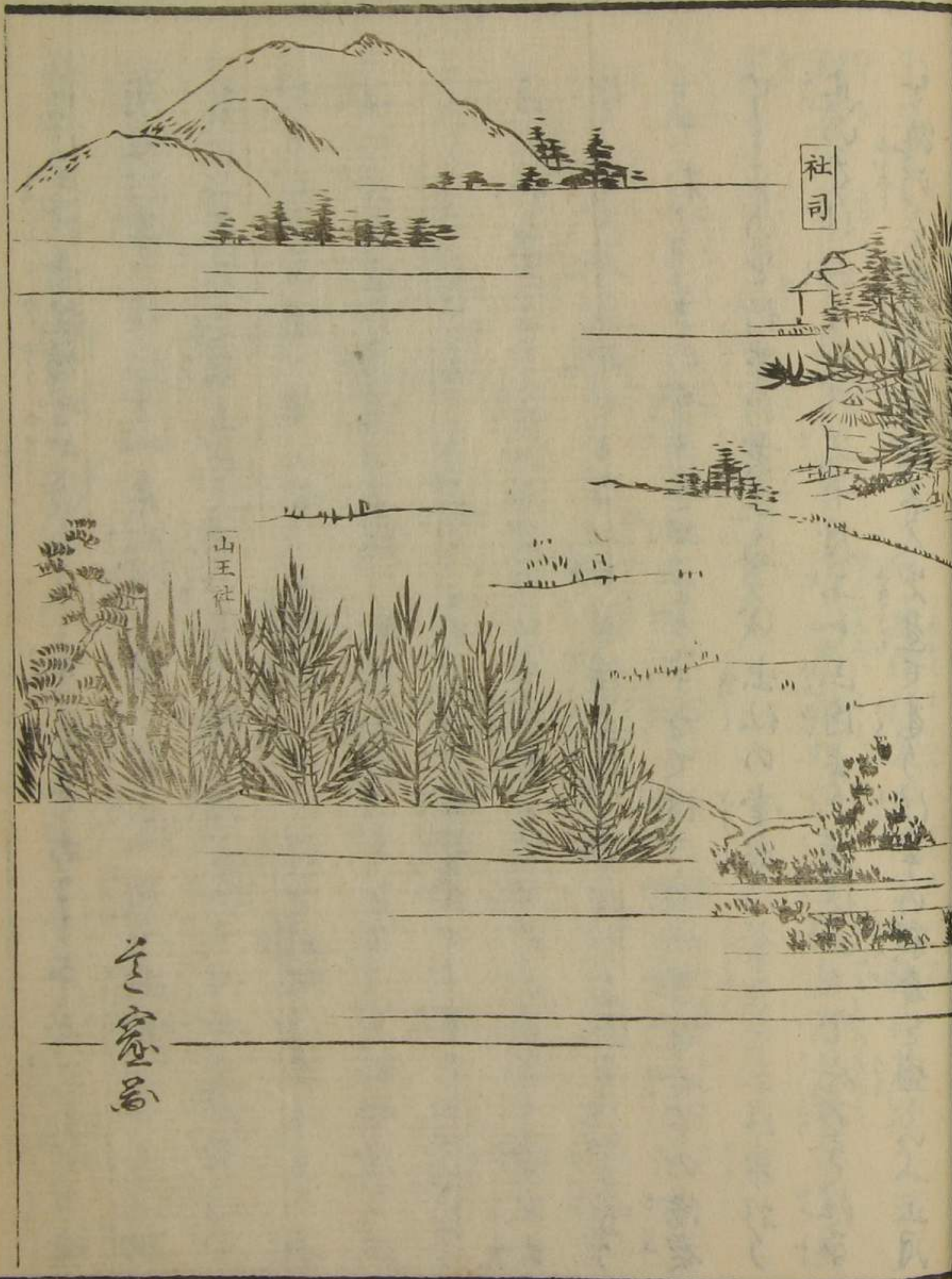
小倉春曉



霧降龍

文
山
筆
大
機
真
年
馬





社司

山王社

生岡



生岡大日堂

野口山王森

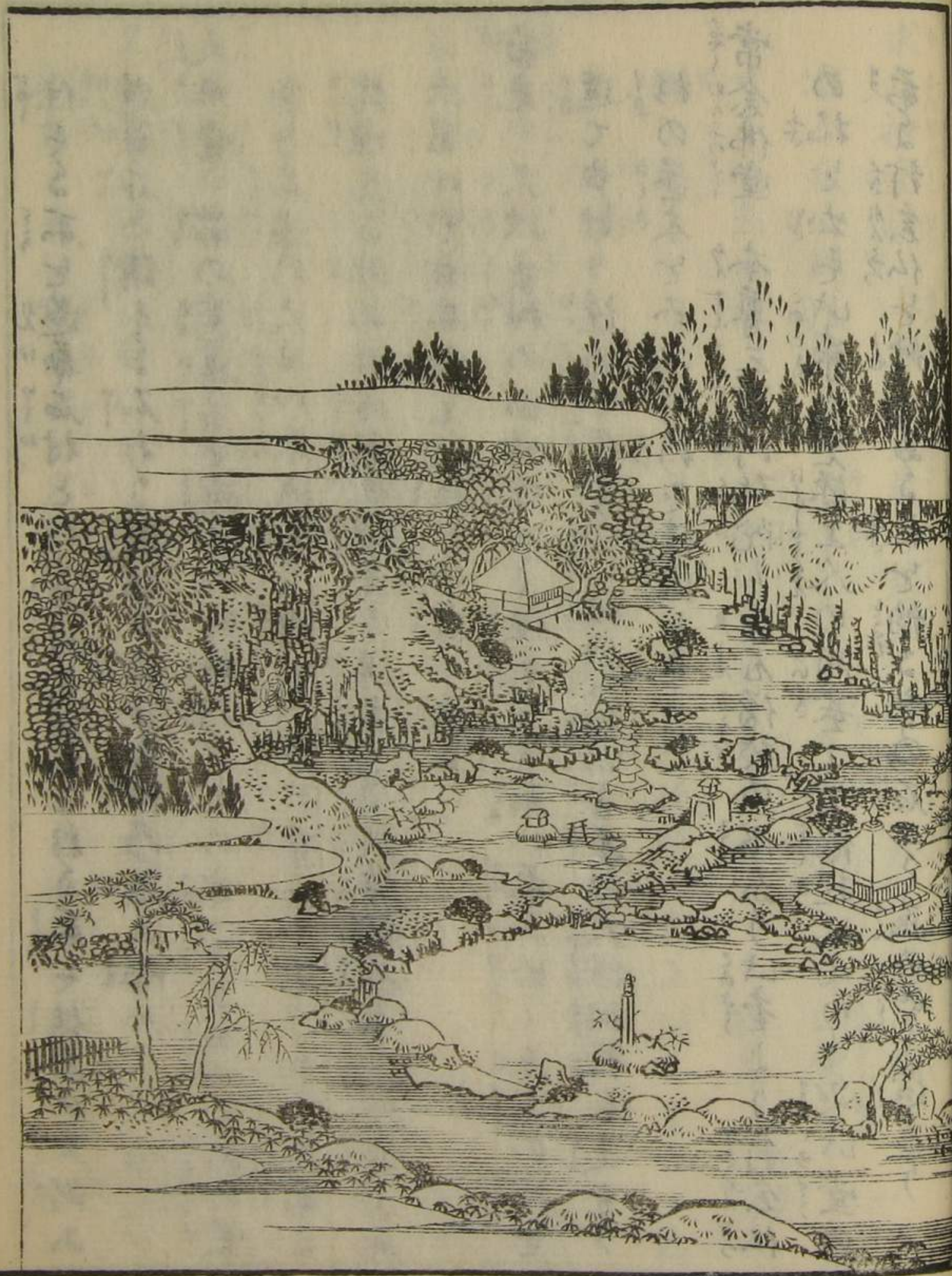
七里村

是バ其以寺院坊舎等のあり一舊迹とてあり一又云大日堂
開建於奉弘仁十一年弘法大師二荒山へ初之齋禁一又云初
爰ハ二荒の山麓あれを先け而小湯を停むハ大日如来此像を
刻せられ草庵を營之安して誓け而少く法を修せしむるを其
後に於り堂宇莊嚴又營造一別尚不あどとあり一と也や然るに
今も大日堂此存する能くされども古本齋戒せしむる毎四跡あり
奉ハ知らせし今ハ正月八日ハ法會とて日光山内より堂荒出
仕一々法會成修せしむる此日道俗系詣一々群を來る古の故実あり
とてねたすきの際肉と号する事ありて村の民庶皆寄合芋の湯煮
せしものを竹串に貫きある成出仕の堂衆乃齋戒とあり奉り
其いこれ初し是後又十月五日ハ山内より僧徒三人下向る法事
を執り金串の承仕人先達て來り法事の教舞を盛といふ正月

十月にもに地乃後とて元僧往及の侍を勅むといひりま
村名を七里と名附奉り山内神橋辺より坂東乃七里なるゆゑ
稱する由里俗の古き傳へあり
尾立石 大日堂此乾の方八九町もよあり首を郎ぬ神大蛇と化
玉ハ小嶺より飛來るハ生岡山の頂より尾を立くまよ宇初宮
の丸山へ飛行る山といひ爰乃磐岩ありと里人の俗説ハ傳へ
山王社 是ハ野に村の北七里村に隣り生岡山ハ相接を大日堂より
東の方より峰を分り奉地十一面觀音あり傳へ聞嘉祥元年
慈覺大師乃草創して山王を勅法しあるといひ毎年十月十一日
大日堂の法會修りけ神祇に法華八講執りあり一が故て中
古ハ山内より僧衆三人出仕せし是二問一答の論議あり是も
承應年中よ元僧荒の出仕も絶く一坊堂衆ハ今も出仕を勅といふ

往古ハ山王の社傳二十一坊合有テ社殿の南北地を惣トテ寺を建
立シ社役を勤め又大日堂をも兼持シテ山多ク地勢崇ク日光
岡宗社事あれば支配せしむド別撥を立んと欲シ下知ニ應ぜざり
由多山内より押寄テ坊合以下悉破布シけるトシテ又由多山大日
堂の法事山王の社役も日光山にて修シ奉仕する事とぞゆえなる
久次良村 古ト久自良ト書ク由多山蓮華石村より東北トテ津堂
山より西トテ南トテ又西トテ北トテ山林入トテ西トテ南トテ荒海の
嶺山續キ東西凡指口ニ町南トテ又七八町の内を久次良村ト唱
北寄の山際ニ 津宮の社家宛トテ人住ト其餘村民等トテ皆山
乃禁ニ教住トテ水より南トテ少トテ湖下トテそれトテ大抵兩トテ
地あり諸久次良トテハ日光権現ニ附ク謂テ地ありトモゆ
往古神社を宇都宮へ移シ奉シ由多彼土トテ外久次良トテハ地名

をも移シ外ハ外山などの外トテ又夏の地トテ舊地あれば外トテ後トテ
義子と有テ又由多外久自良トテ書クを是も後世トテ傳テ今ハ
徳次良トテ書習シゆ多人の名トテ存リトテ説も正トテき據ふるれど
かの是舊ク聞傳ヘキ事トテ其トテ傳テ又愚按を附セリ
糠塚 此塚を蓮華石の先ある大日堂の南トテ大谷川を隔テリ
里人糠塚ト唱シ何トテ寄テ築テその中トテ其由来先トテ近
來家トテ稲荷の小祠を祀るといハ又其邊トテ石を覆ク多ク積並
々トテもあり其謂知レバ
池石 茲ハ寂光乃の傍石の大トテ六尺高トテ六尺許上トテ滑リトテ凹
形トテ三尺トテ四尺程深トテ一尺餘或トテ号シテ生石トテハ早トテ時トテ渴
セバ
蓮華石 系町を通テすレテ田母澤トテハ左トテ右トテ民戸連



大日堂

山寺教圖

住する所を蓮華石村といふ其村名のかこれる所を往來のた例ふ
蓮華石と稱する石あり謂ゆる石ゆゑ此の石小嶋小

大日堂 前の蓮華石を運り二町餘のたの方へ下る坂路を小堂

あり石像の大日如来安ん傍に一字に寮河り南に白く庭前

清潔なる池あり冷泉地中より涌出下底皆砂石を此の廣さ五

六町に方古木葉を枝を四邊に垂る

寂光 久次良村の西北方あり往來する所い前不出し平系の地を

運りゆけり境内へ至る大門踏北入は古木の太杉相對をまより

杉の並木を以六町餘を境内あり

常念佛堂 本尊三尊阿弥陀と惠ん僧都の儀あり此堂より釘念仏

の札を出るに奉り覺源上人の開基して縁起に之り又此堂の

前より釘念仏を修りある札を納るもの石あり函の如く造り

求開持堂跡 本尊虚空蔵并慈覺大師の作といふ此堂の額ハ

准三后公辨法親王の所等なる四大寺あり是は往古に堂在りが廢

せしゆ急元禄六年大棟梁甲良宗賀再建施入し同年前深草の

額を掲げせらるる此堂ととも是所修理の因より何れなるゆゑ

まゝ破壞せしや今所額ハ別所不並けり舊地礎地のみ存せり

寂光寺 開基弘法大師より東寄にあり

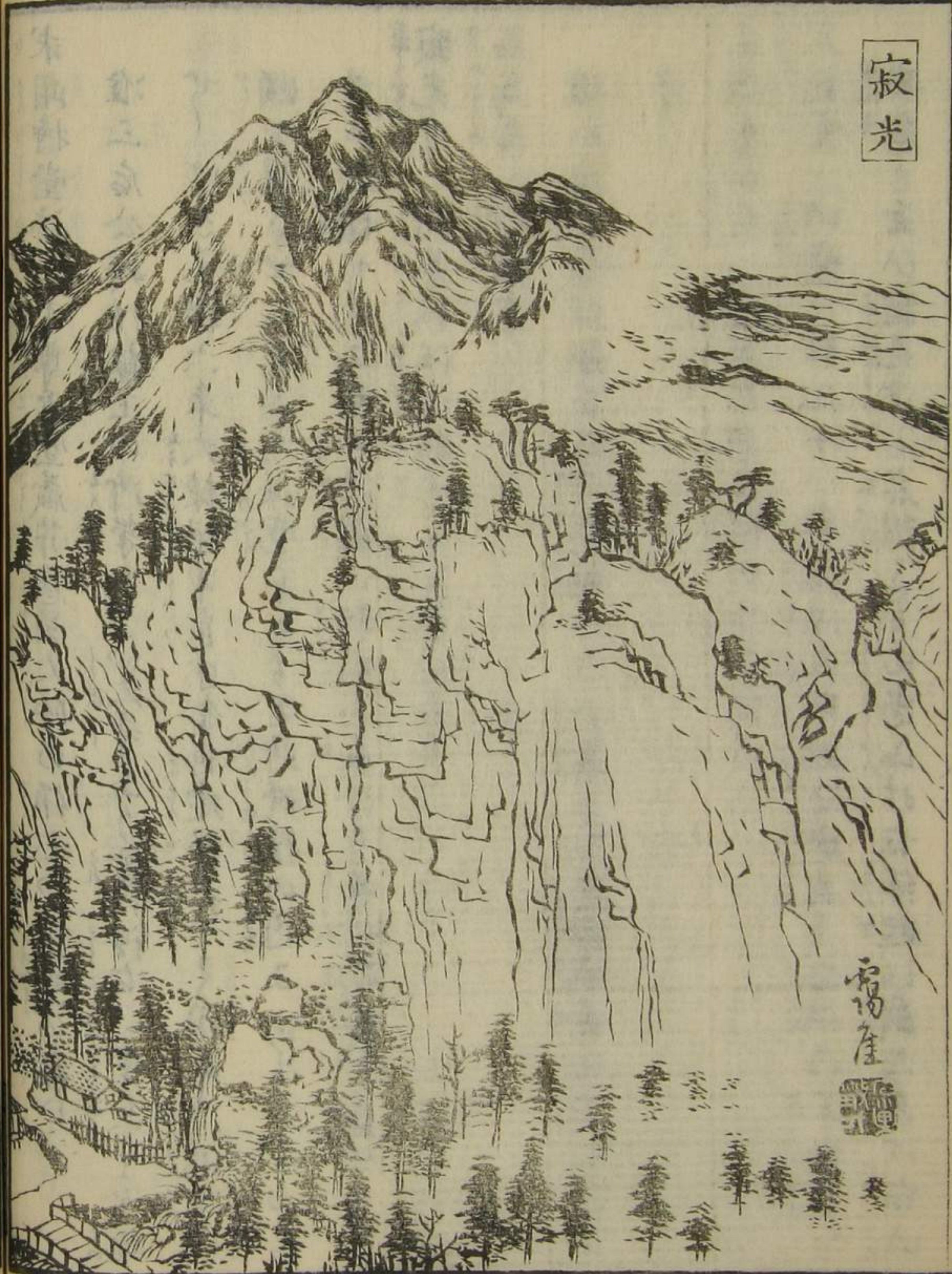
石鳥居 此額字

准三后公道法親王此所真翰あり小篆あり真禱減金小言くおこ

三拾番神堂 鳥居の内石階の下あり

不動堂 此堂ハ弘仁十一年弘法大師始て建立し自仍乃不動堂を

安重一玉ひ寂光寺と名附し由尚山北古縁起に載たるに古



寂光

富彦
[Seal]
[Seal]

堂を以て寂光権現の列石となす。舊跡なり。

拜殿 石階の意より石階曲折せしと二町許登り赤塗椽膏二回

半三回折殿を有る石階の初小三蓋赤塗此處小祠あり

寂光権現 本社七尺許大床造二重蓋木桐瓦赤塗宇桐楹上彫物

色祭神下照姫命本地辨財天弘法大師勸請なり

宝物 十二の宝箱 内小入箱 小相口白鞘 信国作 白味の鏡一面

外小五六面 後一本 紅猪口 曲玉二三箇 錫杖一本

法華經教卷 茅者不知 弥勒經一軸 釘念仏縁起

釘念仏縁起 元禄年中 浄門主浄深筆巻中不図画ハ特世常信筆

粵に下野國日光山乃別和寂光寺覺源上人西方に志深く念仏朝

夕悔く初依り一に戒時とち安うくばく俄小息絶ぬ側又付

ま一草薺さくもど留むごもたぐ茶毘の儀嘗まんとするに上人
の肌膚猶温あゝく生るが如くあれは燈辺乃送も見合一七日此教
過ぬ初て人々怪む爰に上人忽獲生一以の形状を語る我圖王
宮に在り大五我に若く室やと汝今茲小来る履き小何んはこれ
とと婆娑の群生邪見のもの地獄に落ちるもの多し汝も地獄にす
くを見せ衆生を救はせん為なり則大五の教を随ひ地獄を廻り
ぐる大地獄百二十六其餘地獄の教を知れば苦を減するものを
見るに悲しく歎くも堪む圖王宣く凡夫貪欲心にして怠を修
こと限あされを死して後十九日の間は十九乃釘をうくる衆
業の深淺は懸し釘の長短あり六寸八寸或は寸六寸なり或は
三つ左右の肩小二つあり六寸腕又二十腕に十は足の左右に
口口合せくは十九ありは釘を打る時苦を叫ぶ聲上は有頂天に

舞光濕年

峰尖如暗角七

遠香濕中家於然

取低料藏山從

長累石石石石

却黑也一聚

系心何處長流如雪



此寂光瀑布の詩
准三后公辨法親王御上京の初人に被
賦さし先かひ一時長風も賦し多奉
草稿は白筆より成
ゆ多有りて于得るをよりて換て
爰に出

響さ下ハ阿鼻底ニ聞也爾五深々憐々て
此苦を除くと叶がく安樂に於て
依く其苦のみ漸減せしども廿三年
汝毎月志中かを修せしもの
衆生を教化し十九万遍の念
是を其苦のみ成免るべし人
十九箇人なるは十九乃
とあり又十九九九卒於婆
功德之能令亡魂急趣ニ墮
苦を除く抄卒於肉院に
うらほ十九万遍此念仏を修
授くと覺る夢の覺るる

開き見を五輪又は十九の行完を此河に殊に難有事どもあれは
見をのけり此奇異の公ひを寄し邪見の穿忽に任公深く成りけ
れを乞受て念仏修りせんと然へ上人周王此授けあひれを字し
梓に刺し廣く能せり叔世末代といふとも蒐る不思議乃ち放逸
無慙あるもの、教あると流りうは覚えたりと云

文明十三年丑年六月才子沙門謹識日光山寂光寺上人

寂光龍 一名布引滝と号は言ふ六丈餘二三级に飛流を水幅六尺
け道一面の富石續流は流は急瀧のほとに洞潭あり板橋あり
岩はくを奔流と

羽黒龍 布引滝より遠く小寄り河に流るる急流なりは縁と是も
水幅は六尺許言低く急流なりは羽黒山と稱する流は山は麓より
流は来りる由急流なり

遊寂光寺觀瀑

偶尋古跡宋光寺瀑布穿石流不停百尺天然長帶白一條界破茂松
青奔泉餘馬似噴玉飛沫濺花如建瓶試掬餘波閑漱口旅愁洗了自
清冷

寛文癸卯三年四月中旬

春齋林子題

裏見瀧 荒涼滝ともいふ久次良此大日堂より少くは右の方に
傍示河をけ下より山路の吟を凌ぎ西北へ廿町許ゆきて荒涼乃山
上に在るまよを踏をたふ取く尖岩を降り右乃方なり山嶮を見
て危石忽ち落ちるが如き岩下は越え滝乃傍に在る茲は荒涼不
初の石像あり胎小籠堂ありは所は流の横手ゆ急一面を望み
滝乃裏を潜り行く向の方へ廻り見るとあり諸其滝口を盤岩凡一
回解差出する上より瀑水激流して水幅六七尺其岩石の差出る



閑
林
練

裏
見
ノ
龍



下ハ及幅口尺許言六七八尺阿色を滝の裏を潜り透る患ひを
後小希代乃花瀑より係る名勝なる瀑水を八景乃内に入ざりし
うらみとゆふ湯とを極めたる歟

清滝村 神橋色より一里許茲北入口の字を寄居系といふ里むら
清滝権現乃寄居あり跡なる中禅寺並小豆尾色への往來なり
民戸三十家あり陸田もあり

清滝権現 村内往來の脇にあり社殿は往古よりの鎮座あり
其最初を修す小 天武天皇北大宝年中役小角と雲通上人二人
大誓山乃清滝に在り小流上小雲起り雷鳴し雨車袖を流し進
蓋しるゆゑ二人秘咒密言を以て祈禳すれを又忽小天晴たり其
系に大杉あり其上は天狗の首長を殺す春属をむきぬ観し如く
二人は昔て云我々二千年前灵山ふく佛の附属成り帝大魔王と

なりけ山を領し群生を利益とといひ説く又元因茲二人杉樹を
号して清滝に和ぬ神と崇め又滝乃色より手大士を安置し其
地を禱むと云 後世仏法擁護の靈區となれり弘法大師
此神を祀り鎮護せし免又清滝寺を建立すと云 云はゆゑ密宗の
靈地と清滝権現を祀り山内乃鎮守とすることなり古杉樹あり暖
岩敷十丈聳たる和は流あり是を清滝と號せり

清滝寺 勝福山金剛成就院と號し往古真言乃道場なる往古弘法
大師開基し其後慈覺大師登山の以て一山の僧徒皆台教乃法流と
ある此寺も古時より宗流を改めし由とより一山の香華院あり
寛永八年慈眼大師妙道院成剣建ありしより清滝寺の法名を授
され灌室と定めぬと舊記に在るせる由妙道院の蓋帯あり
清滝觀音堂並別當所 長興山福聚院園通寺と號し觀音堂小お双



清龍村
清滝觀音堂
同權現社

清滝權現

清龍村

X

庭を親者六間に面向拜造拵本尊觀音ハ勝道上人中禪寺の千手
 觀者を彫刻し玉ひし其餘を以て作玉ひし千手大士なりといふ
 中禪寺の觀者を坂東十八番乃札不あれど女人禁制の山あるゆゑ
 前立とて茲小安直女順礼ハけ清滝の觀者並ハ札を納めさす
 為なりといふ一説又弘法大師清滝控現を開基し玉小時鑿山乃
 の上に千手大士を安置せし謂を以て此地を玉小摸清滝控現を
 祀す手大士と其時建玉小玉小ともけ傳ふ
 足尾道 清滝村を少く行く中禪寺乃右に於てゆき足尾峠左の
 方へ向ふ其先又細尾といふ小村あり上州筋より順礼其餘の旅人
 妙義榛名を經る足尾へ掛り當山へ來るこの山路は舊く時
 旅人にと備ふる家阿是より足尾峠乃嶺路二里を踰る
 馬返村 細尾村の内ある小名を以て是は余程涼山へ入る所なり

北形とて狹隘一村とていども民戸僅に八九家住せし畑打する
 地も少く大石怪岩の間に畠地とて耕耘をなせり男女皆山
 稼と世業とて女も短褐をまとひ周旋する形勢ハ頗男女とも辨へ
 ざざざこれども是ハ昔より世のそとあり二三十年前とて今ハ入り
 萩他等も能く往來に軒をたし経て茶店三は宇をり酒食あり
 小旅人の口腹を養ふ又是より風俗人物等も山中とはいへど鄙野
 乃朴訥ともありけり
 茶二荒山並風穴 馬返より河原及を以て町好行く往來の右にあり
 嶺端教十丈なる絶壁二山おあり婦男辨女顔の小き山由急茶二荒
 とも小二荒ともいふや儲其峻唯小洞窟あり人漢たあるべし新小
 阿らば遠く禁より其窟の廣狭を謀るに豎一丈許幅六七尺程あり
 見ゆる其深淺知はけ穴より風流出く或は雷歎とて雲に乘り

馬返村
男體山之鳥居



男體山鳥居

前二荒山

中得古乃



雲峰
印



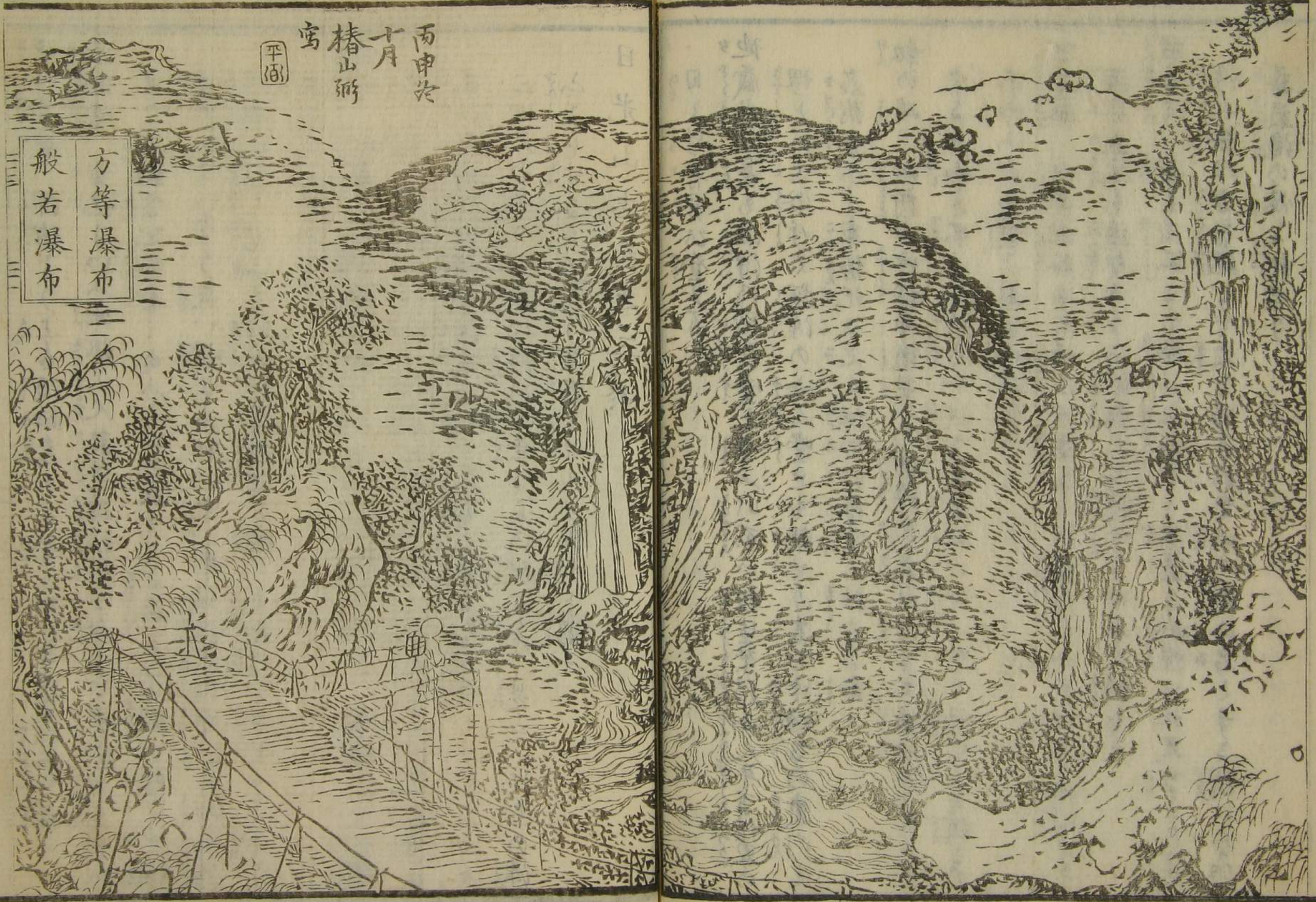
風穴
印

雷と雷と虚空を飛行する畜の正なる宛も雷神宛とていふと
をんされを世より日光雷のすむ所なる處へ又云むうけ宛を
司る神職ありが今ハ終る其子孫 汗宮の俗人とあはるといふ
仍る考るに古縁起より尚山小巖密きて春秋二度宛大風吹出
荒々ゆゆ名庶民難哉せしは弘法大師登山せられ其宛を辟除
結界し玉ふとあるとけ密比事なる處へ丈小付く山乃二荒の境い
前篇に出せり

深澤の茶屋 馬返より湖へ登り来る河原路に棧道或は急流小架
せし危橋を造りて山崎を濟らんとする所も茶店を設く是れ
日月以より八月時分迄茲へ来り住て系詣するは俗休所とて茶
菓此處あるものなる山崎ハ峻なりと云ども肩輿あつても此で
又半日を禁ずるゆゑ中禪寺別荘或は湯元への飯米を外雜品を

日く皆脊負ひ登出り

地藏堂 是も深澤乃北齋堂と唱ふけ不ハ般生禁乃女人牛馬結界の
悞と云土俗傳に深澤の女人堂とも稱せり爰に中禪寺の東門と
名附あひし事縁記に又元禪那付羅密と稱する由
劔の峰 此所は中禪寺通第一乃險難危急此處より通嶮き名んと
するが如く不ゆ名棧乃を設きて通嶮の便とせり此れ上を渡るの
あやふき小嶮く形ハ峰けり
方等嶺 此處深谷より峻山万重ありび聳たる水の旁ある深嶮より
瀑布飛流を遠望する小嶮幅二尺許言さし四五丈程なり
般若滝 是も同不より坤北山谷より流来る嶮幅八九尺言さし二四丈
許水勢は方等嶺より大に洩されけ二嶮の名とする謂ハたの海
華嚴滝の條に記せり



丙申年
十月
椿山
寓

平山

方等瀑布
般若瀑布

中の茶屋 深澤より上ら坂路急あり登りがこきゆ多休所を設く
 不動堂 古記より開祖上人教曼道珍等命して堂宇造立せら
 せり不動尊を安置しありといふ茲より大平といふ所を経て中禪
 寺の如きへなり又一説より弘仁十一年弘法大師登山の時真淨
 阿闍梨因く此山に尻尾に蘇巖寺を建つ不動尊を安置しとあり
 茲ありといひたり

日光山志卷之三 終

大平 此處より中禪寺構にありといふ大抵平坦あり路傍には懸崖
 の多し其餘乃古木ハ碧翠を重移り常に日色を見れば雲霧深き
 所ゆ急樹々の梢は藻草の如く為る葉もなき蓋なるをあるが
 三四尺あり古木に纏ひて垂るその殊は多し是といはれちの深
 山ありと生るものあり其名をサルヲガセと唱ふ

